



100円日和

ヒロシ

「いらっしゃいませ～。1点で105円になります。」

ピピッと商品数を入力して小計を押し、レジの表示窓に「105」と表示された。

一日置きに来るこのおじさん。必ず朝一番に来店し買うものは決まって単三電池（4本入）。一体何に使っているのだろうか。痩せ気味でひょろりと背が高く、肩まで伸びた長い髪には少し白髪が混じっている。年齢は40歳前後だろう。首にはいつも小さめのヘッドフォンがぶら下がっており、そのヘッドフォンから出ているコードがウェストバックの中にある再生機器に繋がっている（たぶん）。何を聴いているのだろうか。ポップス、ロック、演歌・・・落語もありえる。いや、ラジオかもしれない。あ、もしかしてそれを聴くための単三電池か？多くのポータブルプレイヤーが充電式になった現代でも電池式は残っているし、充電式と電池式両方を兼ね備えていたりするものもある。僕はこのおじさんのヘッドフォンの先にある物のイメージがどうしてもカセットテープと結びついて離れない。良くてポータブルCDだ。失礼。人を見た目で判断してはいけない。もしあのバッグの中にiPodが入っていたら土下座して謝ろう。しかしそうすると単三電池の用途がまた謎になってしまうが。

おじさんは二つ折りの茶色い財布から110円を取り出し、受け皿に置いた。

「110円お預かりします。」

レジに「110」と入力する。お釣りが5円であることはわかっているし、計算するまでも無い。そこまで僕の頭は弱くない。「現金/預り」を押すとガチャンと音がしてお金が入っている引き出しが飛び出す（この引き出しは正確にはドロアと言うんだけど、引き出しでも通じるから別にいい。というか逆にドロアのほうが通じないかもしれない）。お釣りの5円を取り出してジジジ・・・と出てきたレシートを千切る。

「5円のお返しになります。」

おじさんはほっそりとした右手をヒラリと華麗に動かし、掌でお釣りとレシートを受け取り財布へ入れる。毎度のことながら非常に美しい動きである。僕はこのおじさんより美しくお釣りを受け取る人を未だかつて見たことが無い。一切無駄無く、肘から指先までしなやかに動かし、柔らかな動線を描く。お釣りを受け取った後は掌をそのまま左手に持つ財布へとスライドさせ、お釣りを財布へ滑り込ませる。まるで財布がお釣りを吸い込んでいるようだ。この動きを見るたびに僕は感動に包まれる。YouTubeに動画を載せたらアクセスが殺到するのではないかと思うほど実に美しい動きなのだ。おじさん、その動きで稼げるよ。

「ありがとうございました。またお越しく下さい。」

おじさんがスタスタと店を出た。歩く姿勢も美しい。おじさんが映る防犯カメラの映像をアップロードしたい衝動に駆られる。

ちなみにこのおじさんは電池以外は買わない。それでも大切な顧客である。たかが100円、されど100円だ。

この100円均一ショップは県内に10数店舗構えているチェーン店で、僕が働いている店は比較的小さく店内にいる従業員は2名しかいない。いや、正確には「多くて2名」だ。パートタイ

ム制でシフトが「9時～14時」「12時～17時」「15時～20時」の3つに分かれており、それぞれの勤務時間が重なる2時間、つまり「12時～14時」「15時～17時」が2名いる時間帯となる。入荷した商品を店に出したりするのはこの時間で、その間は手の空いている方がレジをするようになっている。自分の担当コーナーもとりあえず決められており、僕は「食品」「カー用品」「インテリア用品」が担当だ。この分類の商品が入荷した場合、基本的に僕が陳列することになっている。もちろん他のコーナーであっても整理したりしなければならないし、店に出す商品が沢山あるときは手伝わなければならない。あくまでも「とりあえず」の担当なのだ。商品が入荷するのは大体昼頃なので、朝の勤務はレジに立っていればいい。「いらっしゃいませ」と「ありがとうございました」をロボットのように繰り返し替えず。笑顔も忘れない。接客の基本でもあるのだが、何よりこの店の名は「100円ショップ スマイル」なのだ。ときどき「100円スマイルさんですか？」と電話が掛かってくるが、それだとスマイルを100円で売っている店のように聞こえる。世の中にはスマイル0円の店もあるというのに。

全商品が100円である店は客層が広く、その分変わったお客さんも多い。先ほどの電池おじさんも例外ではない。「電池おじさん」と言ってしまったが、何度も同じ商品を買ったり凄く特徴があったりするお客さんはこのようにネーミングされる。決して口に出して言わないが、自動ドアが開いて電池おじさんが入ってくると頭の中に「電池おじさんご来店～」と浮かんでしまうのだ。他にネーミングされている例としては、アトムさん（寝癖が凄い）、炭さん（炭酸飲料を買いまくる）、サトウさん（サトウのご飯を高確率で買う）、梅ばあちゃん（名前が「梅」っぽい典型的なおばあちゃん）などがある。ちなみに梅ばあちゃんの本名はサチヨらしい。梅さんが当店で買い物をしている時にちょうど知り合いと出会ったらしく「あらサチヨさん！」と声をかけられていた。しかしどんなに本名が「サチヨ」であれ僕の中では「梅ばあちゃん」である。

さて、電池おじさんが去った今、店は暇である。お客さんがいない。品出しする物も無い。滞っている仕事もない。こうなるとやる気もでない。何か面白い事でも起きないかと、道路向かいにあるセルフガソリンスタンドを眺める。珍しい車が給油しているとテンションが上がるものなのだが、6つある給油スペースにはマーチ、キューブ、マークII、マーチ（こちらは2世代前型）、エスティマとありふれた車種しか停まっていない。キューブの男性が出てきたレシートを眺めながら運転席に乗り込んだ時、道路側の空いているスペースにエルグランドが入ってきた。相変わらずデカくゴージャスな車だ。エルグランドは上品に給油スペースに止まる。パカリと給油口が開いた。見事にスタンドとは反対側である。車から降りた主婦らしき女性は「あら？」という顔をして再び運転席に乗り込んだ。予め給油口の方向は確認しておくべきである。車の向きを反転させようとエルグランドがバックしたとき、給油を終えたキューブ（洒落ではない）が顔を出した。

「あぶな」

「い」と発すると同時にエルグランドのお尻がキューブの横っ面に激突した。やってしまった。あの角度だとキューブのヘッドライトが壊れたかもしれない。エルグランドから慌てて降りた女性は「どうしよう」といった表情をしている。キューブから降りた男性と共にぶつかった場所を確認している。給油口の場所さえ確認しておけばこんなことにはならなかったのに。

そんな光景をみて少し気分転換になった僕は仕事を再開することにした。といっても特にすることがないのでハンディモップを手にして陶器の埃を払う。店内には誰が作ったのかわからない「100円ショップ スマイル」のBGMが流れている。

「な～んでも揃う♪な～んでも100円♪まずはスマイルに来てみよう～♪」

なんでも揃うわけがない。そんな店など100円ショップじゃなくても無い。そしてなんでも100円というのが正確には105円だ。捻くれた意見かもしれないが、この手のことをチクチクと言うお客さんがいるので困るのだ。

「105円になります」

「なんだ。100円じゃないのか。わはは。100円ショップじゃなくて105円ショップだな。わははは。」

何も面白くない。どこに笑うポイントがあるのか聞いてみたい。適当に「そうですね、あはは」と相槌を打つが、笑顔が引きつる。これに加えて

「〇〇は無いの？なんでも揃う店じゃないなあ～」

と言われた日には口をガムテープで塞いでやろうかと思う。接着剤でくっつけてやろうかと思う。というかこの曲が悪いのだ。「なんでも揃う」の根拠を聞きたい。気軽にそんなことを言わないでもらいたい。その歌のお陰でいらぬストレスが生まれるのだ。歌っている女性は誰なのだろうか。有名な歌手ではないことは明らかだが。社長の娘さんという可能性もある。または親族か。それとも知り合いのアマチュア歌手か。至って普通の声である。今度余程暇な休日があったらインターネットでこの曲の詳細を検索してみようかと思う。

せっせとハンディモップを動かし続け、ズラリと並んだ陶器類の埃が殆ど無くなったころ自動ドアが開いた。

「いらっしゃいませ～！」

お客さんの姿を見る。短髪の20代男性。ヨレヨレのTシャツにジャージ。ちょっと幸が薄そうな印象である。食も細そうだ。

男性は店内を軽く見渡し、ポリポリとこめかみを掻きながら文房具用品のコーナーに向かった。そして目的のものを見つけたらしく、一つ手には元の場所に戻し、また手には元の場所に戻すを繰り返している。「そんなに迷うな。100円だぞ？とりあえず買えばわかるさ！」と念力を送ってみたが、男性の薄幸オーラに跳ね返されてしまった。幸は薄いけどオーラは厚いらしい。

とりあえず僕はレジに行き、男性が会計に来るのを待った。彼の品定めは長い。その間に数名お客さんが来店され、自動ドアが開くたびに「いらっしゃいませ」を繰り返す。条件反射のように声を出すのだが、この影響で他店で買い物をしている時、思わず「いらっしゃいませ」と言いそうになるから怖い。一度父が家に帰ってきた時「いらっしゃいませ」と言ってしまったことはあるが。

やがて薄幸男がゆっくりとレジに来た。

「いらっしゃいませ！」

と笑顔で迎えると、彼は履歴書とボールペンを静かにレジへ出した。履歴書とボールペンとい

うことはこれから面接なのだろうか。しかしこの服装でそのまま面接には行かないだろう。一旦家に帰るのか。しかし家に行けばボールペンくらいあると思うのだが。果たして彼は無事面接に挑めるのだろうか。などと余計なことを考えながらレジを打つ。

「2点で210円になります」

彼は無表情のまま手に握っていた210円を丁寧に受け皿に置く。予め会計の準備していたらしい。こういうお客さんはレジがスムーズになるので非常に有りがたい。

「210円丁度お預かりします。」

レジから吐き出されるレシートに手を伸ばした。

「あ、レシートいりません。」

透き通るような声が出た。「彼が喋ったのか」と気付くのに0.3秒ほど時間を要した。

「はい、かしこまりました！ありがとうございました！」

頭を下げる。彼は商品を手にしレジを去って行った。背中を見つめていると、彼の美しい声が頭の中でリピートされた。こういうものは一度浮かぶと中々沈まない。彼が自動ドアへ行くまで僕の脳内では「あ、レシートいりません」「あ、レシートいりません」と何度もリピートされた。そして「面接を控えているらしい薄幸男（美声）」が店を出る瞬間、僕はその再生に終止符を打つように心でつぶやいた。グッドラック。

時計を見るともうすぐ12時だ。腹が減った。眠い。疲れた。早く帰りたい。店内のBGMの魔力も重なり、僕の意識が空へ昇りそうになった。

「パリーン！」

目が覚めるような音がし我に返った。音がした陶器コーナーに目をやるとショートパンツを履いた若い女性が「やっちゃった」という顔をしている。僕は「やっちゃいましたね」という顔をした。足元には割れた陶器が転がっていた。原型はご飯茶碗だろうか。同時に女性のスラっとした脚に目を向けそうになったが、ぐっと堪えて破片を見つめ続けた。ふと目を上げると胸元が大きく開いたTシャツが視界に入る。思わず動きが止まりそうになるが、僕は気合で女性の顔に視線を固定させて駆け寄った。

「お怪我はございませんか！？」

女性の表情をみると戸惑っている様子だったが怪我は無いようだ。僕は視線を下げてしまわないように気をつける。

「すみません・・・」

「いえ、構いません。不安定な場所にありましたから。」

事務室から箒とチリトリを持ってきて、セッセと破片を片付けていると女性の視線を感じた。これは緊張するパターンだ。先ほどからこの女性が漂わせている良い香りも危険である。僕の致命傷になりかねない。誘惑を巧みに交わしながら破片を集めていると女性が口を開いた。

「あの、代金支払います」

「あ、いえいえ、結構ですので。」

「でも・・・」

「あ、いやあ、場所がねえ・・・うん。もう少ししっかり置かないと。ははは。」

たぶん僕は固い笑顔になっている。

「でも、私が落としたので」

「お怪我が無かただけでも良かったです。ええ。代金は結構ですので」

「そうですか・・・すみませんでした。」

女性は頭を下げると、良い香りを残して僕の元から離れていった。売り場に残った香りが徐々に消えていく。それにつられ僕自身も別な世界へ行ってしまいそうになったが、なんとか現実に踏みとどまり無我夢中で掃除した。

陶器のような割れ物の扱いは困ったものである。こういうことは度々あるのだが、余程のことが無い限り代金は頂かない。たかが100円である。されど100円だが。

破片を片付けレジに戻ると先ほどの女性が会計に来た。視線を下げてはいけない。再び緊張が訪れる。心臓の鼓動に合わせてカゴの中身を数える。

「1点、2点、3点、よんごーろくしちはちくっ！」

僕は早くレジを終わらせたかったのだが、それを嘲笑うかのようにレジが「ピー」とエラー音を出す。「あら？」と平然を装う僕の背中には変な汗が出始めている。

「クリア」やら「取消」やらを押してなんとか危機を脱した。一安心である。女性は会計を終えると去り際に遠慮がちに頭を下げた。

「さっきはすみませんでした」

「いいえ、またご来店ください。」

僕は最高の笑顔で応える。あなたの胸に届け、このスマイル。おっと、「胸」といっても「心」という意味である。

女性が店内を出て行く様子を、目線が下に落ちないように気をつけながら眺めていた。自動ドアが開く。

「ありがとうございましたー！」

緊張の糸が解け、思わず目線を下げてしまった。

美しい脚である。ああ僕は完全に誘惑に負けてしまった。

開いた自動ドアから吹き込んできた風が、店内にぶら下がっている数々の風鈴を鳴らす。100円の美しい音色が店内に響いた。

どうやら今年は猛暑らしい。本日で5日連続の40度越えだ。店内の冷房を28度に設定しているのだが少し動いただけで汗が出る。冷房の風が当たって比較的涼しい食料品のコーナーでゆっくりと仕事をしていたとき店の電話が鳴った。スナック菓子を整理していた僕はその手を止め、レジへ向かいキャッシャーの脇にある子機を取った。

「お電話ありがとうございます。100円ショップスマイルの西川です。」

「あ、清志くん？高野だけど。おつかれさまです。今日30分くらい遅れるかもしれないけど大丈夫かな？」

「はい、大丈夫ですよ。」

「じゃあ、そういうことでお願いします。」

「はい、わかりました。」

ピッと終話ボタンを押した。高野さんはこの店の店長である。女性でやや小太りで背は低い。性格は朗らかでこれと言って嫌なところはない。年齢は35歳くらいだと思うが女性に年齢を尋ねるのはかなり抵抗あるので聞いたことは無い。子どもは2人いるらしく両方男だという。一番上の子は今年中学生2年生になったとか。時々学校帰りに店に寄って文房具を買っていく。あいさつがしっかりできる良い子どもだ。

ちなみに非常に申し遅れたが、西川清志は僕の名前である。学生の頃の渾名は当然「キー坊」。小学校から高校卒業まで横山という同級生がいなかったのは幸いだ。もしいたら恐らくコンビを組まされて文化祭などで無理矢理漫才をさせられただろう。幸いにも店のエプロンにつけている名札には名字である「西川」としか書いていないので、この件でお客さんに色々と言われることは無い。

さて店長が30分遅れるということだが、特に僕の仕事に影響は無い。むしろ1人の方が気楽に仕事ができたりするので、30分と言わずに1時間くらい遅れて来ても結構である。是非とものんびりしてきて欲しい。

僕は中途半端になっていた先ほどの作業を続けることにした。この2、3日中に新しいスナック菓子類が入荷する予定なので、そのスペースを作っておく。こうして段取りしておけば僕が休みの時に入荷しても、その時にいた従業員が困ることなくスムーズに店に出せる。はずなのだが、大抵は僕が出勤する日まで事務室のストック棚に置かれている。なんとも律儀な従業員達である。

せっせと作業をしていると背後から声をかけられた。

「あのお・・・すみません」

「はい、なんでしょうか。」

振り向くと、杖を突いたお爺さんが立っていた。反対の手には茶色のハンドバッグを抱えている。

「あのお・・・こういうのをねえ・・・こういうのを探しているんだけどねえ・・・」

お爺さんはバッグのジッパーを開けてゴソゴソと探り始めた。どうやらメモのようなものがあ

るらしい。

「あああ・・持って来たはずなんだけどねえ・・・あのおねえ・・・なんて言ったらいいのかなあ・・・」

ゴソゴソをバッグを探り続けるお爺さん。非常にスローペースな喋り方である。中々見つからないようだ。

「中身ここに出してもよろしいですよ」

商品を少し移動させて平台の一部を空ける。こういう配慮が大切である。

ふとレジをみると、10分程前に来店されたお客さんが会計に来たところだった。店内は僕1人である。当然僕が行かなければ会計は出来ない。

「あの紙どこにしまったかなあ・・・あのおねえ・・・」

お爺さんはバッグの中身を一つ一つ取り出す。会計を待っているお客さんがキョロキョロし始めた。黄色信号である。

「なんだやあ〜・・・この頃忘れっぽいなあ・・・どこ行ってもこうなんだわあ・・・」

全て中身を出したものの見つからず、一つ一つしまいながら再度確認している。

「すみませ〜ん！」

ついにお客さんが声を出した。僕はお爺さんに「少々お待ちください」と言い、レジに駆け出した。

「大変お待たせしました！」

と謝り、1、2、3、4・・・ピッピッとレジを打つ。

「ありがとうございました！」

会計を終えて再びお爺さんの元へ。お爺さんはバッグの中身を何度も確認し、折りたたまれたティッシュを広げたりしている。

「持ってこなかったなあ・・・」

ようやく諦めたお爺さんは探している物の説明を始めた。

「あのおねえ・・・こう・・・なんて言ったらいいのかなあ・・・・こういうねえ・・・」

説明にしどろもどろしている間に、またレジにお客さんが来てしまった。レジへ駆け出し会計を済ませ、お爺さんの元へ戻った時に今度は電話が鳴った。もはやシャトルランだ。よくわからないが忙しい。店長、一刻も早く来てくれ。僕は数分前に思ったことを取り消した。

「ちょっと説明できないから・・・後でもう一回来ますわ・・・・なんだべやあ・・・」

ついの説明も諦めたお爺さん。

「はい、かしこまりました。お待ちしております。」

深く頭を下げて、レジへ駆けつけ子機を取ろうとしたが既の所で電話が切れた。タイミングが非常に悪い。こういう場合再び掛かってくる可能性が高いのでレジで待機しているとお客さんがポツポツと入ってきた。明るい声で挨拶をしながらレジ周りを整頓する。やがて色々とカゴに入れた女性が会計に来た。

「10点で1050円になります。」

女性が財布を開いている時後ろに違うお客さんが並び、そのお客さんの会計をしているとまた

後ろに誰かが並ぶ。

「315円になります。」

「840円になります。」

「105円になります。」

誰かがレジへ向かうと何故か次々と並び始めるお客さん。これには心理的な根拠があるのだがここで説明するのは控える。この近辺には何かの営業所やら書店やらドラッグストアやらがあり、この時間帯は昼休みになった従業員たちが買い物にくることがある。そういう時は中々レジから離れられなかったりするのだが、今まさにその状況であり、ここを上手く捌けるかどうか店の印象の鍵を握る。店長が遅れている今日、まさに僕のスキルが試されるのだ。

そんな客の波も30分ほどで途絶え暇になった。先ほどのお爺さんは僕がスタイリッシュに会計をこなしている間に店から出たらしい。ふとお爺さんが欲しかったものが何なのか気になった。商品の名前をメモした紙か雑誌や広告の切り抜きを持ってきたらしいのだが、口で説明するのは難しい物のようだ。後ほど再び来るような事を言っていたが杖を突いていたので今日中に来ることはないだろう。無理は禁物である。どの辺りに住んでいるのか判らないが、来店するのは一日一回が好ましい。そういえば「誰かが開封して売り物にできなくなった膝サポーター」が事務室にあったのを思い出した。今度来店された時は是非プレゼントしようと思う。

しばらく店内が静かだった（変なBGMは流れている）が、ゲラゲラとした笑い声と共に自動ドアが開き、派手なお婆ちゃん達3名、アロハシャツさんと麦藁帽子さんと紫パーマさんが入ってきた。

「あ〜、ここはあんまり涼しくないねえ！」

「ジュースでも買っていくべよ！」

「あらっ！これも100円だっちゃ！」

「どれどれ？あああ！これ！これいいわあ！」

「なんだべ！同じのあの店で98円で売ってっから！」

「あら本当！？んでそっちの店で買うかなあ！」

「はっはっはっは！」

「いやいや、暑い暑い！」

入ってくるなり失礼である。「いらっしゃいませ！」と出迎えたものの、いらっしゃらないでくださいと思った。そのテンションだったらどこに行っても暑いだろう。この人たちなら北極圏でも半袖で過ごせるかもしれない。彼女らが入店してから室内温度が2度ほど上昇した気がする。エアコンよ、頑張ってくれ。

ちなみに100円均一ショップで売っている商品は、一般的な店で98円や84円で売ることが多々ある。しかし反対に、他店では100円以上の価格が付いているものを100円で売っているのも事実である。例えば原価が95円の商品を100円で売る店など普通は無い。儲けはたった5円だし、1時間に100個売ったところで人件費にもならない。しかし100円ショップでは当然これを100円で売る。特に当店ではそういった「原価ギリギリの商品」を定期的に仕入れる。それらの商品を目立つところに陳列して手に取らせ、それを買うついでに儲

けが多い商品を買ってもらおう戦略である。巷に溢れている100円ショップの中には、全て100円でしっかり元が取れる商品を扱っている店もあるのだが、当店は違う。某有名メーカーのシャンプー、リンスを98円で仕入れて100円で売った時もある。倒産しかけたショップの処分品を安く大量に仕入れたのだ。来店されたお客さん達が何度も「これ1人何個でも良いんですか？」と聞いてくるので、面倒になり『お1人様∞（在庫ある限り）』というPOPを貼った。「本物ですか？」と疑われたので「本物在庫処分！」というPOPも加えた。すると20個くらい買って行くお客さんが続出し、仕入れたシャンプー500個、リンス500個があっという間に無くなった。その商品だけを買っていかれると儲けは少ないのだが、後に「また売っているかもしれない」と思わせて足を運んでいただくことが狙いだ。当店は、原価が20円30円の「安かろう悪かろう」の商品ばかり売っている100円ショップとは訳が違うのである。

さて、当店の方針について熱く語るはこの辺でやめておき、店内を見る。先ほどの3人組は入り口付近で一頻り会話をした後、それぞれ別れて買い物を始めていた。

アロハシャツさんは菓子類コーナーで飴を次々とカゴに入れていく。どれ程のペースで食べるのか知らないが、糖尿病が心配だ。麦藁帽子さんは台所用品コーナーに行き何やら吟味している。ペリペリと音がするのは袋を開けて中身を見ているのだろうか。100円ショップではこういうお客さんが多い。案の定、ガスコンロのカバーを広げて大きさを確認しては「あ～もう少し大きいといいのになぁ」と嘆いていた。銀色の表面が照明を反射させてキラキラと輝いている。もちろん商品のサイズや形状は表面にしっかりと記載されているため、袋から出さなくても判るようになっているのだが……。再びペリペリと音がした。今度は小さいサイズのカバーを広げた。「これだと小さすぎるのよねえ」と言葉を発したかと思うと、すぐに違う売場へと移動した。……あなた出した物を袋に戻していないだろう？

レジで一抹の不安を抱えながら彼女らを観察していると、陶器コーナーにいた紫パーマさんが僕に近づいてきた。

「パンチーないの？パンチー。」

パンチー……。パンチーとはなんだろうか。まさかパンティーではあるまいな。と思い、聞き返した。

「はい？なんでしょうか？」

すると紫パーマさんは堂々と言い放った。

「パンチーよ、パンチー！下着！」

衝撃的である。確かに当店で下着類も売っているが、こんなにも躊躇無く尋ねられるとは思ってもいなかった。しかも「下着」ではなく「パンチー」である。恐るべし。僕とした事が若干動揺してしまったが、悟られないように冷静な顔を保ち紫パーマさんを案内した。

「下着用品はこちらになります」

「ごゆっくりどうぞ」とレジに戻る。

紫パーマさんがパンチーを品定めしていると、アロハさんと麦藁さんもパンチーコーナーに集結し、会話が始まった。

「あらあ～ハイカラだごどお！」

「これ履いてみっぺが!？」

「なんだべ!爺さんたまげんでねえ!？」

「たまげで死なれだら困んな!」

「な〜に言ってるの!若い時はもっと凄いの履いでだから大丈夫!」

「あやあ〜はっはっはっは」

一瞬とはいえ「もっと凄いパンチーを履いた紫パーマさん」を想像してしまった自分が情けない。別に聞きたくないのだが僕の耳は魔女達の声を拾ってしまう。というか、声がでかいのだ。今店内には彼女ら以外にお客さんはいないので迷惑にはならないのだが、ここに1名男性がいることを思い出してほしい。思わず聞いてしまう方としては拷問である。なんとかしてこの魔女達の会話をシャットダウンできないものかと思い、必死になって変なBGMへと意識を集中させる。

なんでも揃う〜♪なんでも100円♪

ごく普通の歌声であるにも関わらず、何度も聞いていると洗脳されそうになる。「世の中全て100円だ」と脳が悟り始めた時、ふと耳栓を売っていることに気が付いた。よし、ここは1つ失敬させていただこう。これは必要経費である。

レジを離れ耳栓を置いてある場所に行こうとしたところ、魔女達がレジに向かってきた。ついに会計である。団体で来たお婆ちゃん達は「何点買ったか」を競う傾向にあり、カゴを見せ合っては「あら!そんなに買ったの!？」「おらもほれ!」と言ったりする。このお婆ちゃん達も例外なく、レジ前でカゴを見せ合っては笑い合っていた。

非常に気になっていた紫パーマのお婆ちゃんのカゴの中身であるが、どうやら無難なパンチーにしたらしい。アロハさんはノンシュガーの飴を選んで買ったようなので糖尿病の心配はなさそうだ。麦藁さんのカゴにはガスコンロカバーは無かった。

一番多く買ったのはアロハさんで18点。次が麦藁さんで15点。紫パーマさんは10点。

それぞれの会計が終わり、そのまま隣のスーパーへ行くような会話をしていた。僕は「冷房の設定温度を2度ほど下げておいたほうがいいですよ」とスーパーへ電話しようかと思い、子機へ手を伸ばしかけたが余計なお世話だと思い引込めた。

嵐が去った店内を見回ると、袋から出されたガスコンロカバー2点と派手なパンチー何枚かが散らかっていた。それらを整理しているうちに店長がようやく出勤。実に1時間の遅刻である。

それから勤務時間が終わる14時まで僕は商品の補充業務を行った。結局杖のお爺さんは僕の勤務時間内には現れなかった。僕は脱いだエプロンをロッカーにしまいタイムカードを押した。ふと棚にあったプレゼント予定の膝サポーターが目にとまり、なんとなく肘につけてみた。不思議なものでTシャツ一枚にサポーターを付けると闘志が湧いてくる。

頭の中で「み・さ・わ!み・さ・わ!」と聞こえ、この勇姿を誰かに見てもらいたくなりそのまま家路を急いだ。

今日は12時から出勤であるが、眠りから覚めたのは朝5時。余程のことが無い限り僕の起床時間は変わることはなく、何時からの勤務であろうと休みの日であろうと朝5時には目が覚める。そういう体質なのだ。起きてすぐに布団を畳み、欠伸をしながら台所へ行く。棚からコーヒー豆の袋取り出し、密封していたクリップ開けて匂いを嗅ぐ。この瞬間が堪らない。心の奥で燻っている悪が浄化されるようであり、どんな後味の悪い夢もこれには敵わず綺麗サッパリと消えていく。ある程度悟りを開いたところで適量を袋から出し、手動のミルに入れて中挽きで挽く。軟水のミネラルウォーターをコーヒーメーカーに入れ、挽いた豆をコーヒーフィルターにセットしてスイッチオン。安物のインスタントコーヒーと水道水を沸かしたお湯で作ったコーヒーを100円のマグカップで飲みながら、コポコポと滴るコーヒーを見つめる。これから美味しいコーヒーを飲むのにインスタントコーヒーを飲むのか！と言われそうだが、コーヒーを飲みながらコーヒーが出来上がるのを待つのが僕流なので大目に見ていただきたい。

インスタントコーヒーを飲み干すと、出来上がった香りの良いコーヒーをお気に入りのコーヒーカップ（ちょっと高級）に注ぎ、味と香りを愉しむ。朝食代わりにタバコ2本も欠かせない。届いたばかりの朝刊をパラパラと捲り世の中の情勢を大まかに調べ、番組欄も確認。新聞を一通り読み終える頃には頭が目覚めている。次は体を目覚めさせるべく、パジャマからジャージに着替え、腕立て伏せ、腹筋、背筋30回を3セット行う。こういった僕の朝の習慣は極めて健康的だと思う。タバコと朝食を交換したら100歳までは確実に生きられるのではないだろうか。大好きな酒をやめれば150歳も夢ではない。

トレーニングを終え、ワイドショーとネットサーフィンで時間を潰し11時が過ぎた頃、早めの昼食を食べて仕事用の服に着替え、愛車のホンダビートを走らせた。高回転域までスムーズに吹けあがるNAエンジンは気持ち良い。幌を開けて心地よい風を受けて、気分を最高に高ぶらせた状態で出勤したかったのだが、生憎今日は雨が降ったり止んだりパラついたり不安定な天候である。しかしこういう状況は傘の売り上げに貢献してくれるので有りがたくもあるのだが。

従業員用駐車場に車を止め、店裏にある事務室のドアから入った。タイムカードを押してエプロンを着け、姿見で乱れが無いか確認する。どうやら顔以外は乱れないようだ。僕の担当売場の商品が箱に入ったまま御丁寧に放置されていたので一通り中身をチェックして、空いている台車に積んだ。2箱分ある菓子類の商品を店に陳列することから始めようと頭の中で仕事のシミュレーションしたが、今日の朝番が相沢さんだったことを思い出し僕は軽くため息をついた。

相沢さんは僕よりも2年ほど先に入社した女性従業員である。年のころなら30前後だろうか。やや長めの髪を一つに結んでおり、化粧は濃いめだ。眉のラインは完全に原型を無視している。視力が悪く、遠視用の丸い眼鏡をかけているため、説明するまでも無く「メガネの相沢」と僕の頭に呼ばれている。真っ赤なルージュでニコリする不敵な笑みは見るものを凍らせる。私生活においてはミステリーな部分が多く、高確率で独身だと思うのだが事実はわからない。会話のキャッチボールが難しく、何を言おうとしているのか理解できない時が多く、肩慣らしのつもりでフワッと投げたボールを、全力で投げ返されることは日常茶飯事である。性格にも癖があり

、自分の道しか見ていない。マイペースと言うものではなく、見ている世界が違うのだ。その為、接客業として致命的な部分を持っている。何かとトラブルを引き起こす人で、お客さんに怒られている姿も度々見かけるため、相沢さんの接客を見ていると肝を冷やす。

「〇〇ってどこにありますか？」

「目の前です。」

とこの上なく簡潔に即答したりする。例え「目の前」にあっても「こちらです」などと言って手を差しだすべきだろう。その後のお客さんの反応が心配になるが、何事も無かったかのように商品を見ているのを確認すると安堵する。とにかく相沢さんの接客はハラハラするので、一緒に仕事をするのは正直に言うと嫌である。

しかし仕事は仕事だ。嫌だなど言っていられない。世の中は不景気である。今朝の新聞でも大卒の内定率が68%と出ており驚いたばかりである。仕事があるだけでも有りがたい。

「よし、今日も頑張るか！」

気合いをいれ、事務室から店内に続くドアを開けると、パニック状態に陥っている相沢さんが目に入った。キャパシティを超えている様子である。今日は頑張れないかもしれない。

「おはようございます！」

爽やかに挨拶をする。

「あ！西川君！これやってください！」

陶器と新聞紙を渡された。挨拶も無くいきなりヘルプである。どうやら陶器を大量に買ったお客さんがいて、その上タイミング悪く電話がなって、更にレジが混んでしまったようだ。状況は把握できたが、挨拶くらいしてほしい。早くも相沢ワールドに飲み込まれそうである。「ピー」「ピー」とレジのエラー音なる度に相沢さんのパニック指数は上がっていく。

10数点あった陶器を僕がセッセと包んでいる間、相沢さんは一心不乱にレジを打つ。陶器を全て包み終わり、袋に入れてお客さんに手渡した。

「大変お待たせしました！ありがとうございました！」

頭を下げ、ふとレジを見るとポーっと突っ立っている相沢さんが目に入った。客の波が去り放心状態になっているようだ。

僕はわざとらしく「ふう・・・」と大き目のため息をつく、宙を泳いでいた相沢さんの焦点がピタリと定まり、僕を見て口を開いた。

「おはようございます！」

先ほど僕が挨拶してから15分程経っている。だが、このリズムが相沢さんなのだ。このリズムに逆らってはいけない。無駄にエネルギーを消費するだけである。

「おはようございます」

僕は再び挨拶をし、続けて

「忙しかったみたいですね」

と切り出した。すると相沢さんは例の不適な笑みを浮かべながら即答した。

「そうでもないですよ」

自分の言っていることがわかっているのだろうか。誰が見ても忙しかったはずである。しかし

僕はここでもリズムを合わせ返す。

「あ、そうですか？でも一瞬忙しかったですよ？」

相沢さんは少し間を開けた後に口を開いた。

「菓子類の品出しやってください。」

・・・脳の血管が4本程切れそうだ。相沢ワールドに順応できるのは当分先のことに思えた。僕の脳は「これ以上会話を続けるのは困難である」と判断し、相沢さんの指示に従い菓子類の品出しを始めることにした。

レジを相沢さんに任せて事務室へ行き、先ほど積んだ商品をガラガラと押してきた。菓子類コーナーに辿り着き、箱を開けて再度中身を確認し、陳列のイメージを思い浮かべる。ただ何となく陳列するのはマーケティングではない。お客さんがどのような流れで商品を手にするかをしっかりと考えなくてはならない。6割ほどイメージが膨らんだ時、遠くにいたお客さんがこちらに近づいてくる気配がした。「いらっしゃいませ」と言いながらチラリとお客さんに目をやると、頭も顔も体系もダルマさんのようなオジさんが僕のすぐ横までツカツカと迫ってきた。この雰囲気は嫌な予感しかしない。

「おい、あのメガネの人！あれじゃ接客態度ダメだぁ！」

ほらきた。ダルマさんはヒッソリとしながらも力強い口調で言った。やや顔を紅潮させている。どうやら「メガネ」特有の接客術が気に入らなかったらしい。

「はい、申し訳ございません！」

頭を下げると、ダルマさんは続けた。

「いやいや、あんたじゃないんだよ。あのメガネだぁ！なんだが客を小馬鹿にしたような言い方して！」

僕自身の事ではなくても謝らねばなるまい。

「はい、忠告しておきます。誠に申し訳ございませんでした。」

もう一度頭を下げた。「忠告する」とは言ったものの、3年も先輩の相沢さんに僕から注意するのは嫌なので、こういう時は店長に頼むようにしている。

ダルマさんが店から出ていったのを確認して、メガネさ・・・いや、相沢さんを見た。実に平和そうな顔をして店内を眺めている。どんな接客術を使ったのだろうか。僕の接客術の向上のためにも是非とも聞きたかったので相沢さんのいるレジへ向かった。話を切り出すタイミングを見計らっていると、

「なんか怒られてませんでした？」

と軽く馬鹿にしたような微笑みを浮かべながら僕に聞いてきた。開いた口が塞がらないとはこのようなことをいうのだろう。想定外の展開に僕の思考は停止した。そして若干の間の後、

「まあ、頑張ってください」

とこれまた馬鹿にしたような微笑みで言い放った。停止状態の思考が一気に高回転で吹け上がり、レッドゾーンに突入した。S2000も真っ青の回転域に突入するKIYOSHIツインカム。あまりの回転ぶりにシャフトが折れそうだ。僕はアクセルペダルから足を離し、喉まで出かかった罵詈雑言を必死で飲み込む。喉から食道へ、食道から胃へ、胃から小腸へ・・・。

オナラが出そうになってきた。とりあえず落ち着かねばと思い、「相沢スマイル」に曖昧な返事をして事務室に一旦戻り、タバコに火をつけた。凍りつきそうだった身体が徐々に感覚を取り戻していく。時計を見ると針は12時50分を指していた。まだ50分しか経っていないのにこの疲労感。相沢は確実に僕のエネルギーを奪っている。いや、僕のエネルギーどころか、生きとし生けるもの全てのエネルギーを奪っているのではなだろうか。あの「相沢スマイル」も生命力を奪う一つの術なのかもしれない。心に隙を見せたら最後である。彼女が独身（恐らく）である理由がわかる気がした。

タバコが短くなったので灰皿で揉み消し、いざ戦場へと向かおうとしたとき、外へ通じる事務室のドアが開いた。入ってきたのは店長だった。

「あ、店長！おはようございます！」

形式ばった反応をすると、店長は柔らかな笑みを浮かべた。

「おはようございます。もう小休憩入ったの？」

僕は先ほど起きた災難を一部始終を伝えた。店長は「えええ・・・」と呟き、頭を少し抱えた。

「厳しく忠告しておきます。」

店長も相沢さんには色々と参っているようだ。僕がこの店で働くことになった初日、店長に「相沢さんって人がいるんだけど、気をつけてね」と言われた。その時は相沢さんがどういう人かわからなかったので意味を理解しかねたが、初めて相沢さんとシフトが一緒になったときに全てがわかった。数日後、

「相沢さんどうだった？」

「なんか・・・凄いですね。」

「ふふふ。凄いやねえ。」

店長は微笑んだ。本当に凄いのだ。例えて言うなら、と例えられない。その凄さ故に、彼女の担当売場はレジ前のみだ。店長の話によると、以前は他の売場も担当していたようなのだが、予想外のことがどんどん起きてしまうので徐々に減らしていったらしい。「相沢さんの担当売場を少なくしたらクレームも減った」と店長は言う。事務室の壁に貼ってある接客注意事項に「相沢に気をつける」を加えるべきではないか。今度提案してみよう。

さて、相沢さんが担当しているレジ前(正確にはレジ横)であるが、一言で言うとカオスである。メッシュラックで3段に作られた棚が設置されており、ここにはジャンル分けが難しい物や品数が少なくなった商品が置かれている。上段には100円ライターと携帯灰皿、その間に売れ残りのフォトフレームが、中段には線香、ローソク、香典に並んで招き猫が佇んでいる。この猫は何を招いているのがろうか。非常に縁起が悪い。当然この猫が売れた例はない。下段は貯金箱で統一されている。一口に貯金箱と言っても、定番のブタさんを始め、丸型、角型の郵便ポスト、賽銭箱の形をしたちょっと面白いものや、「〇〇円貯まる」などと書かれているやる気の満ちたものなど様々な種類があるのだが、ここに何故か一輪挿しが混ざっている。どうやってこの小さな口からお金を入れれば良いのだろうか。お札なら丸めれば入ると思うが小銭は無理である。いや、もしかするとこれはお札専用の貯金箱なのかと思い、手にとってひっくり返して底を見ると、

見事に「イチリンザシ」とラベルが貼ってあった。会計途中にこの幻想的な棚をボンヤリと眺めているお客さんたちは、自分が気付かぬうちに少しずつ相沢ワールドに入り込んでいることなど知る由も無い。

14時になり、相沢さんの勤務時間が終わった。程なくして事務室から店長が出てきた。

「言っておいたからね。」

「何か反応してました？」

「うん。『今日は雨ですからね』って言ってたよ。」

意味がわからない。

「『雨でも晴れでもお客様には丁寧な対応をしてください』って言ったら『はい、わかりました』だってさ。」

わかっていないと思う。僕も店長も苦笑いした。これで同じ時給なのだから困ったものである。

ウィンと自動ドアが開き、お客さんが入ってきた。

「いらっしゃいませ！！」

「お、今日は兄ちゃんだね。」

朗らかな男性である。機嫌が良いらしく鼻歌を歌いながら店内を歩きだした。

相沢さんはこういった機嫌のいい人をも変貌させることがあるから怖い。

お客様、先ほどまではメガネの戦場でしたが爆弾は撤去しました。ごゆっくりお買い物をお楽しみください。

105円の会計に一万円札を差し出すお客さんが3人立て続けに来た。9895円を取り出すのは非常に面倒くさい。大抵こういうお客さんは9割が両替目的である。見分け方は簡単で、会計をしている時に何の躊躇いもなくサッと一万円札を出す人は高い確率で両替目的である。一方、小銭入れを開けて「あら？」と言い、札入れを見て「あらら？」と言い、やや渋った表情で一万円札を出して受け皿に置きながら、再び財布の中身を確認している人は両替目的ではない。むしろ「105円ごときに一万円札を使いたくない」と思っているかもしれない。もちろん演技している可能性も否定できないが。

両替目的であっても、「すみません、一万円札でよろしいですか？」と一言でも添えてくれれば「はい、よろしいですよ」と笑顔で返し比較的気持ちよく接客できるのだが、無言でポンと置かれると嫌な気分になるものだ。それに付け加え、「五千円札じゃなくて、全部千円札でもらえない？」と言われた時には「銀行に行ってこい」と言いたくなる。正月が近づくとこのパターンが実に多くなる。言うまでもなくお年玉が原因だ。五千円札があると細かい配分が出来ないのである。しかしそういう要望に対しては丁重に断らせていただいている。釣銭で用意している千円札が足りなくなってしまうのだから仕方ない。中には受け取った五千円札を崩すために、もう一度レジに来て105円の会計に五千円札を出す人もいる。「さっき渡した千円札あるだろ！」と言いたくなる気持ちをグッと堪えて4895円お釣りを渡すのだが、笑顔が引きつってしまう。

ところで「一万円札でもよろしいですか？」と聞かれたとき「いえ、ダメです」と言ったらどうという反応をするのだろうか。言ってみたいのだが、面倒事になるのは嫌なので我慢しておく。機会があったら相沢さんに試してもらおう。あの微笑みで断られたら恐らくトラウマになるだろう。

さて先ほどから店内は、カゴに沢山商品をいれた女性たちの話し声で賑やかである。僕のファンクラブ御一行様が久しぶりに来店された。彼女らが店に入ると一気に華やかな雰囲気になる。

「いらっしゃいませ！」

「コンニチハ、ニシカワサン！」

「ハイ！」

「コニチハ！」

僕のファンクラブは主に外国人で構成されている。この界限に住んで働いているフィリピーナさん達だ。いつからどのようにして結成されたのか、何人いるのかなどはわからない。ここで働き始めて数ヶ月たった頃、1人で来店されたフィリピーナさんが僕の姿をジッと見つめていたことがあった。この店の従業員は僕以外全員女性で、僕の前に働いていた人も女性だったということで男性店員を珍しく感じていたのだろうと思った。その数日後、彼女は3人程フィリピーナさん達を引き連れて来店された。彼女らは商品棚の陰で僕の姿を見て何か話をしていたが、僕はフィリピン語が解らないのでどんな会話をしているのか理解できなかった。会計の時にリーダー格の1人のフィリピーナさんが「ナマエ、オシエテクダサイ」と聞いてきたので「ニシカワ。アイム、ニシカワ。」と言うと「ニシカワ」「ニシカワ」「ニシカワ」と皆で連呼していた。そして「ワ

タシ、カレン。コノヒト、ジェニファー」と紹介され、ジェニファーさんは僕と目を合わせ「アイラヴユ〜」と言った。突然の告白に僕は戸惑ったが「ありがとうございます」と言い、ヘラヘラとした顔でその場をやり過ごした。愛を告げられて悪い思いはしない。しかもジェニファーさんは中々可愛い顔をしていたから尚更だ。

その後、彼女らが来店される時に一緒に来るフィリピーナさんが4人5人と徐々に増えていき、その度に紹介された。今店内には8人のフィリピーナさん達がいる。入店したときに僕がレジにいないとボソボソと何かを言い合う。多分僕がいないことを悲観しているのだろう。やがて陰の方で品出ししている僕を見つけると「コンニチハ」「ニシカワサン、オゲンキデスカ？」と挨拶をしてくる。「アナタ、キュートネ」と挨拶するのはジェニファーさんだ。基本的には別に問題ないのだが、店長と一緒に仕事している時もお構いなくラブコールをしてくるのがちょっと困る。

「あら、西川君。『バイバ〜イ』だってよ？」

「あー、はい。いつものことですから。」

「モテモテだねえ。どの娘が好み？」

などとからかわれたりする。

ちなみに僕は独身で、彼女もいない。20歳の時に出会って4年間付き合っていた彼女には2年前に別れを告げられた。心に深手を負った僕はそれからは特に恋愛をする気も起きなく惰性で過ごし現在に至っている。

人肌が恋しくなる時というのは夏であれ冬であれ訪れるもので、この2年の間にも何度もあった。そのため、少しでも気を緩めればフィリピーナさん達の勢いに流される可能性があった。僕はフィリピーナさん達が来店すると気合を入れて自分を保った。勘違いしないでいただきたいのは、別にフィリピーナさんと恋愛をするのが嫌だと言っているわけではない。一時の情に流されてはいけないということだ。相手のことが本当に好きなのかどうかの判断は、自分の心がしっかりと満たされている時にできる。ところが、今の僕の心は餓死寸前であり、目に映る食料を片っ端から食べようとしている。これでは相手に失礼である。「失礼はいかん！」と自分自身に叱咤するのだが、彼女らは実にキュートである。スタイルも美しい。彼女らが来ると店内が非常に華やかになるし、何かと声をかけてくれるので僕は心の何処かで彼女らを待っているときがある。少しフィリピン語を勉強してみようかと思うこともしばしばあるくらいだ。

彼女らのような外国人のお客さんは珍しくはない。フィリピーナ始め、チャイニーズ、コリアン、カナディアン、アメリカン、ジンギスカン、オバタリアン。随分と日本もインターナショナルになったものである。全品が100円というシンプルなシステムなので日本に不慣れな方でも気軽に買い物をできるのが大きな理由だと思う。僕は少しだけなら英語が話せるので、何か尋ねられたときは脳をフルに働かせて英語で案内する。

ちなみに外国人さんへの対応を相沢さんがすると面白い。片言でゆっくりと日本語を話すお客さんに対して、全く無遠慮に日本語をまくし立てる。相手が理解できずにやや困った顔をしていると「あら、通じませんか？」なんて言ったりするから、もはやイリュージョンである。今度店長に彼女を雇っているメリットを聞かせていただこう。

フィリピーナさん達の会話に耳を傾けていると（理解できないが）自動ドアが開いた。入ってきたのは警察官だ。何かあったのか。

「すみません。〇〇警察署ですが。」

「はい。」

僕は何もしていない。

「実は先日ですね、こちらの・・・」

こちらの西川は何もしていないはずだ。

「こちらの店から万引きをした中学生がいますね」

「あら、そうなんですか。すみません。」

思わず謝ってしまったが僕のせいではない。

「消しゴムとシャープペンを取ったらしいのですが、これおたくの商品で間違いはないですか？」

警官は手に持っていた紙袋から消しゴムとシャープペンを取り出した。コンビニやデパートなどでも売っているような一般的なものだ。

「間違いないとは言えませんが」

言葉を詰まらせた。

「どこにでもありそうな物ですけどね。本人がこの店から取ったと言うので。」

「じゃあ当店のものでしょうか」

「それですね、現場の写真を取りたいのですがご協力願えますか？」

「ええ、いいですよ。」

警官を文具売場へ案内する。フィリピーナさん達はその様子をコソコソを眺めていた。ひょっとして僕はあらぬ疑いをかけられているのか？安心したまえ、僕は無実だ。

文具売場につくと警官がカメラを取り出した。

「ええとですね、その商品があったところを指差してもらえますか」

僕は消しゴムが置いてある位置を指差し、カメラを向いた。もう片方の手でピースサイン。

「あ、ピースいりません」

無愛想な顔で注意される。冗談の通じない警官だ。パシャパシャと2枚撮影し、同じようにシャープペンの場所の写真も取った。その語、店内のことや従業員のことを大まかに聞き

「ご協力ありがとうございました」

と店から出ていった。

万引きした中学生は恐らく違う店でも万引きをして見つかってしまい、警察を呼ばれて取り調べを受け、そこで当店での犯行を告白したのだろう。防犯カメラはあるものの、この店は死角が多い。挙動が怪しいお客さんがいるときは、近くに行って商品を整理したりしながら監視するのだが、何せ店員が少ない上に細かい商品が多い。万引きGメンを常駐させておかない限り、犯行を防ぐのは難しいのだ。

困ったものだとレジカウンターに手を付いて頭を悩ませていると、フィリピーナさん達が会計にきた。

「いらっしゃいませ！」

「ナニアツタンデスカ？ポリス。ポリス。」

リナさんが言う。

「あー、万引きですよ」

「マンビキ？」

「万引きってのは・・・ええと」

万引きをどう説明しようか。脳が様々な言葉の引き出しを急いで開けて探し出していると、近くにいた他のフィリピーナさんと会話を始めた。言葉のところどころに「マンビキ」が挟まれている。そしてリナさんは「マンビキ」を理解したらしく、僕に向き直った。

「ダメデスネ。オカネ、オカネ。」

「そうですねえ。困ったものです。」

「ワタシたち、シッカリカッテマスヨ。オカネ、オカネ。」

リナさんは必死で主張している。

「はい、大丈夫ですよ。」

笑顔で応えた。あまり必死になると逆に怪しいですよ、リナさん。

彼女らは会計を終えると、彼女らは大量に買った品物を分担して持った。

「マタネ」

「バイバイ」

「アイラビュー」

ジェニファーさんはラブコールを忘れない。

「ありがとうございました！」

店内を見渡すと誰もいなくなっていた。静けさの中、僕の頭の中で「オカネ、オカネ」というリナさんの声と必死な顔が行ったり来たりしていた。

それから淡々と業務をこなし、勤務時間が終わる17時が近づいた頃、主婦らしきお客さんが入店するやレジカウンターに来た。

「すみません、先日私の息子がこちらの店で物を取ったというのですが・・・」

「あー、はい。先ほど警察の方がいらっしゃいました。」

お陰で無駄に冷や冷やしましたよ。と心で続ける。

「そうですか。ご迷惑をおかけして大変申し訳ございませんでした。遅くなりましたが支払いたしますので。おいくらでしょうか？」

「ええと、2点でしたので210円ですね。」

「はい、わかりました。」

主婦さんはバッグから財布を取り出し、申し訳なさそうな表情をたっぷりと浮かべて「すみません」と言いながら210円を差し出した。僕はそれを受け取りレジに打ち込む。レシートを受け取った主婦さんは「本当に申し訳ございませんでした」と深く頭を下げ店を後にした。何故か僕も申し訳ない気持ちになってしまい「いえ、こちらこそ」などとわけのわからない返事をしてしまった。とりあえず店長に報告しておかなければと思い、メモを店長の机に置いて本日の勤務が終了した。

帰宅途中に100円ショップに寄った。他店調査である。当店にない面白そうな商品をチェックして歩き、発見したらメモをとる。後に店長と相談して必要ならば発注をかける。新しい商品は細かにチェックしているのだが、当店の主な取引先にはない商品などはつつい見過ごしてしまう。なので他店調査は非常に重要だ。テレビで「100円グッズでできる収納」などの番組があり、当店にない商品が紹介されると非常に痛い。ちなみに仕入れる時は同じ商品ではなく、より質が良いものを仕入れる。多少原価が高くて「こっこの100円は丈夫だぞ」とアピールするのだ。その甲斐あってか「スマイルの商品は壊れにくい」とお客さんによく言われる。嬉しい限りだ。壊れない商品は店の信頼を上げる。しかし商品の回転率を上げるにはある程度壊れてもらったほうが良い場合がある。なので当店では商品が入荷した際、段ボール箱に一撃を入れるのが基本になっている。こうすると商品の強度が多少落ちるのだ。もちろん冗談だが。いや、本当に。本当の冗談である。

翌日。

僕の目の前に蓋がある。これは一体どうしたことか。レジで暇そうにしている川島さんに声をかけた。

「これの相方はどこに行ったんでしょうか」

川島さんに見えるように蓋を掲げる。

「え？無いの？」

「はい、これだけ横に転がってました。」

「えええ。」

川島さんが僕の元へ歩いてきた。

僕が手にしているのはタッパーの蓋である。蓋が付いた状態で陳列してあるタッパーの横に、本体を失ったこいつが転がっていたのだ。

「下だけ買ったのかしら？」

「そうかもしれませんね」

僕は苦笑いする。

普通、タッパーは蓋と本体で一つだ。別々に売ることはない。恐らく誰かがタッパーの幅や深さを確認するために蓋を外して測り、「これで良し」と思って一安心してそのまま蓋を置き去りにして買っていったのだろう。しかしそういう場合は会計の時に店員が気付いて指摘するものだが。

いや待てよ、あの人ならそのまま売るかもしれない。

「相沢さんがレジだったんだね、きっと」

やはりそう思うか。僕もそう思っていたところだ。川島さんは少し呆れた顔をしている。

川島さんは相沢さんよりも1年早くここで働いている。年齢は僕の2つ上。ロングヘアーで

茶髪。つけ睫をしており今時風の女性である。顔立ちは悪くないのだが、やや自己中心的な性格で、機嫌が悪い時はすぐにわかるし、結構人に当たってくる。その性格の為か彼氏はいない（と思う）。しかし何かと頼りになる人で、一緒に仕事をしていると非常に頼もしい。面倒なお客さんの対応をしたあとに「うるせんだっつーの」と川島さんがボソッと発言したときがある。思わず笑ってしまった僕を見て「あ、聞こえた？だってさあ、うるさいじゃん。死ねよって思うよね。」と笑顔で言っていた。だぶん元ヤンだ。良く言えば「開けた性格の人」で、裏がないとも言えるのだが。川島さんに「私と付き合わない？」と告白されたら多分断る。僕はまだ死にたくない。まあそんな事が起きる可能性は200%無いが。

川島さんが、タッパーの在庫が入っている引き出しを開けようとしてしゃがむと、Tシャツが上に引っ張られ背中が見えた。ズボンと腰の隙間から下着がチラリと見える。僕は本能的に視線をやってしまったが、我慢することは良くないし、目の保養にもなるのでジックリと拝見させていただいた。今日はピンクである。川島さんの情報を脳にインプットした。

僕はタッパーの蓋のことなどどうでもよくなりつつあったが、とりあえず川島さんと一緒に本体を探した。やはり蓋無しで売ってしまったようだ。本体を探すのを諦めて、レジの脇に置いておくことにした。もしかすると、後で気付いたお客さんが来るかもしれない。蓋のないタッパーなど使い道があるのだろうか。

タッパー事件未解決のまま、入荷した商品の陳列が終わり、暇になったので店内の見回りをする。園芸品売場にあった色とりどりの花を1本手にし、少しばかり気取って匂いを嗅いだ。造花なのでなにも匂わない。川島さんがレジカウンターから不思議そうな顔をしてこちらを見ていたので、「無臭です」と言うと川島さんは軽く鼻で笑った。花を手にしてウツトリするようなナルシストだと思われるのは困るので造花をさっさと元の場所に戻しながら、なんという名前の花なのだろうかと思いラベルを見た。

「ハナ」

それくらいは知っている。その名を知りたいのだよ。

僕は引き続き店内の見回りを始めた。食品コーナーに行き、少々乱れている清涼飲料水を整える。この店にある飲料水は輸入物が多く、原価も安い。以前、2本で100円の缶ボトル飲料水があった。表記が外国語で味の想像が出来ない。お客さんに「どんな味ですか？」と聞かれると困るので、試しに買って休憩時間に飲んでみた。シュワッと炭酸の刺激が口に広がり、少しだけ甘く、鼻の奥で草の匂いを感じる。飲み込むと都会の水道水を飲んだような後味で、つまりは驚くほどに不味い。喉が渴いていたのにも関わらず体が拒絶反応を起こした。この商品について尋ねられたら正直に「おすすめしません」と言うことにしている。2本で100円だからといって売れるとは限らない。買う方に見れば、2本で100円という物は「お買い得」というよりも「訳あり」の商品に見える。値段の陰に蠢いている何かしらの深い理由を探るのだ。故に、手にとって眺めるお客さんは結構いたのだが、得体の知れない飲料水に大半の人は抵抗を感じて商品棚に戻す。ごく稀にはあるが、物は試しと買っていくチャレンジャーもいた。しかし彼らが再びその商品を買うことはなかった。あまりにも売れないので3本で100円にしよう

かと思ったが、怪しさに拍車をかけるだけである。そして半年ほど陳列した後、商品棚から姿を消した。それ以降、2本で100円という類の物は仕入れていない。

14時になり、朝番だった川島さんの勤務時間が終わった。

「じゃあお先しますね。」

「はあい、お疲れさまでした〜。」

夜番の店長が出勤するのは15時。これから1時間は僕の独壇場である。お客さんも少ないのでフリーダムだ。さて何をしてサボタージュしようか。ロッカーのバッグに入っている読みかけの本でも読もうか。僕は読書家であり、年間100冊程の小説を読む。ジャンルはあまり問わず、新しく出た本を手当たり次第に読むのだが、全て購入するのは金銭的に厳しいので殆どは図書館から借りている。出勤前まで読んでいた本の話の続きが気になるので30分程読書をさせてもらおうかと思い、本を取りに事務室に向かおうとした時、ウィンと自動ドアが開いた。

「いらっしゃいませー！」

「おはようございます」

「あ、店長」

僕のフリーダムは2分で終了した。

「川島さん帰った？」

「はい、今帰ったところです。」

「あ〜遅かったかあ。電話でもいいかなあ。」

どうやら川島さんに用事があったらしい。電話で済むなら最初から電話で伝えればいいのに。

結果的に1時間程早く出勤した店長は事務室へ行き、溜まっていた仕事を始めた様子だった。相変わらず忙しそうだ。僕も忙しいふりをしなければ。

本のことは諦めて、まずは食料品の棚に並べていた缶詰を全て取りだし埃を払った。鯖の味噌煮、味付き鰯、赤貝、焼き鳥。グリーンピースとスイートコーンは輸入物らしく、ラベルの文字が何語なのかわからない。缶の側面に載っている写真で判断しているのだが、非常に不味そう。どんな美味しい料理もこれを使った瞬間に台無しになりそうである。

缶詰というものは中々売れない商品だ。考えてみれば100円ショップで缶詰を買わないといけない状況というのもあまりないと思う。菓子や飴類と一緒に缶詰を買うだろうか。単品でも美味しく食べられる鯖の味噌煮や焼き鳥などはごく稀に売れるのだが、食材であるグリーンピースやスイートコーンの缶詰は全く売れない。大抵こういった種類の缶詰は、スーパーなどで夕飯や弁当の食材と共にカゴに入るものだと思う。何故ここにグリーンピースとスイートコーンがあるのだろうか。この2品だけ変なオーラを放っている。

このような回転率の悪い商品というのはどの分類にもあり、それをどうにかして捌くために配置をより目立つ所に変えてみたり、少々大袈裟なPOPを書いたりする。僕は手にしたスイートコーンの缶詰を眺めながらこの商品の特徴について考えた。缶詰といたら真っ先に浮かぶのは賞味期限の長さである。缶詰をひっくり返し裏側に印字されている賞味期限を見た。「20120731」と機械的な文字が並んでいる。今日は8月2日であるから、賞味期限まで約1年程ある。と思った瞬間、僕は違和感を覚えた。レジカウンターに行き、備え付けてある小さなカレンダーを見る

。ファンシーなカレンダーの上部には「8月」と書いてあり、その上にやや小さ目の字で「2012」とある。今日は2012年8月2日だ。缶詰の底を再度確認する。「20120731」。これはもしや製造年月日なのだろうか。しかし僕の記憶には3日以上前からこの缶詰が存在しているし、1年程前にこの商品を陳列した記憶までもある。

僕は他の缶詰も確認した。「20131201」「20130301」「20131201」・・・。「20120831」という迫る賞味期限が書いてあったのはグリーンピースだ。スイートコーンとグリーンピース。こいつらが変なオーラを放っていた理由がわかった気がした。

僕はそれらの缶詰を持って、事務室にいる店長へ急いだ。

「店長、これヤバイです。」

「どれ？あー、缶詰？」

僕は缶詰の底を店長に見せる。

「・・・うそお。ええ！？製造年月日じゃないよね、これ。もっと前から置いてるもんねえ。」

多少賞味期限が過ぎても食べられないことはないのだが、売るわけにはいかない。

「お客さん、買っていかなかったよね？」

「そうですねえ、売れた様子はなかったので大丈夫なはずです。」

不幸中の幸いである。あれ程買ってほしいと思っていたのに、今では買ってもらわなくてよかったと思っている。

「在庫どれくらいあるの？」

「グリーンピースが9個でスイートコーンが10個ですね。」

入荷数は両方とも10個だった気がした。1年で1個しか売れないグリーンピース。1個も売れないスイートコーン。あるだけ邪魔だ。

「西川君、全部持って帰って良いよ」

店長が笑いながら言う。

「いや、うちでは誰も食べないです」

他の缶詰なら喜ばれるかもしれないが、こいつらを持って帰っても嫌な顔をされるだけである

。

「あ、相沢さんに持って行ってもらおうか」

「それ名案です」

「とりあえずここに置いてて」

僕は缶詰19個を事務機の端っこに置いた。店長が「相沢さんへ」と書いたメモを貼る。果たして相沢さんは持って帰ってくれるだろうか。相沢さんは明日出勤なのだが、生憎僕は非番であるため、結果を知るのは明後日以降だ。しかしいくらなんでもこれを全部持って行くことは無いと思うが。

ついでなので、先ほどのタッパーの件も報告しておいた。やはり店長も相沢さんを疑う。僕は少しだけ相沢さんが可哀想になった。本当に少しだけだが。

16時になり僕の勤務時間が終わった。明後日のニュースが楽しみである。

僕は19個の缶詰に別れを告げタイムカードを押した。

「薄くはめやすいゴム」というPOPを見て「ついにアレも100円で買える時代になったのか！というか100円で大丈夫か？破れたりしないか？何個入りなんだ？」などと思いながら、若干期待して商品を見てみたらゴム手袋だった。紛らわしいPOPである。勘違いしてしまったではないか。

現在18時30分。店内には僕と6名のお客さんがいて、みんな静かに買い物をしている。客足のピーク時間はサラリーマンやOLの帰宅時間になる17時から今の時間くらいまでなのだが、今日は早めに客足が遠のいた。あとは閉店時間までスマイルを保つだけである。余裕たっぷりなのだが、こういう日にはちょっとばかり面倒なお客さんが来るものだ。レジ前のカオスな棚を整理していると50代半ばの男性が声をかけてきた。

「ジッパーないの？ジッパー」

さて、ジッパーとは何だろうか。ジッパーと言ったら手芸品のやつだろうか。ジッパー、ファスナー、チャック。色んなネーミングが頭に浮かんだ。もう少し詳しく聞こうとする。

「服などに使うジッパーでしょうか？」

「何言ってるの？ジッパーだよ、ジッパー。知らないの？」

ジッパー、ジッパー、ジッパー。僕は店に置いてある商品を物凄い早さで脳内検索した。様々な商品のイメージを次々とスライドしてはゴミ箱に入れる。これも違う、これも違う、違う、違う、違う。そして「もしかするとこのことか？」という商品で止めた。それは食べ物や小物を入れて保管する時に使う、ジッパーが付いた袋だ。確認しようと口を開きかけたとき、お客さんはやや苛立った表情をして言った。

「袋の口を止められるようになっているやつあるじゃん。こう、ビーって。」

手を動かしてジッパーを閉じる仕草をする。やっぱりそうだ。

「あ、はい！ございます！」

お客さんを売場へ案内し、「こちらでしょうか？」と商品を見せる。

「そうこれこれ。これジッパーっていうんだよ。知らなかったの？」

それは違うだろ。

商品には「チャック付きビニール袋」や「ジッパーが付いているので便利！」とか書いてある。ジッパーとはこの頭の部分のことを言うのだ。「ジッパーが付いている」と紹介されているように、この商品の本体は「ジッパー」ではなく「袋」だ。しかしこの男性の頭はこういった種類の物全体が「ジッパー」というネーミングで統一されているらしい。恐らく家族内では「ジッパーちょうだい」といえばこの袋が出てくるんだろうが、それを家庭外で使われると非常に厄介である。ちなみにジッパー、ファスナー、チャックは名前は違えど同じ物である。アメリカのグッドリッチという会社が作ったのがジッパーで、ユニバーサル・ファスナー社が作ったのがファスナー。チャックは日本のチャック・ファスナー社が作った物の登録商標で日本独自の呼び方のようだ。チャックというネーミングは「巾着」からきているらしい。僕を軽く馬鹿にしたこの男性に「ジッパー」というものについての正しい情報を多少説明したい気持ちがこみ上げてきたが、こういう人は自分の狭い常識を簡単に変えないために要らぬトラブルを招くだけである。恐ら

くこの男性は今日の夕飯時に「これ買いに行ったらさ、あの店員ジッパーわからないんだよ。参っちゃうよな」と話のネタにされるだろう。参っちゃうのはこっちである。なんだか悔しい。

「申し訳ございませんでした」

不本意ながらも頭を下げた。今後は気をつけます、ジッパーさん。

僕はレジカウンターに戻り、ジッパーさんの会計を待っていた。理想的なサイズの「ジッパー」を探しているようだ。

突然、陶器類がカタカタと鳴り出した。もしやこれは・・・ポルターガイスト！とボケる間もなく、店全体がグラグラと揺れ始めた。地震である。しかも大きい。僕は自動ドアを開け、電源を切って開放した。店内の商品がバタバタと落ちる。陶器が割れる音が響く。

「お客様！避難してください！」

出入り口に広がった商品を蹴飛ばし、お客さんが転ばないようにスペースを作る。既に何人かのお客さんは外に出たのだが、まだ店内に残っているお客さんもいる。子供の鳴き声があるのでその方向に行くと、幼い女の子を連れた若い女性が戸惑っていた。僕は泣きじゃくる女の子を抱き上げ、女性を外へ誘導した。駐車場で女の子を降ろすと、後ろからついてきた女性が「ありがとうございます」と言った。僕は「いいえ」と軽く微笑み「お母さんと一緒にいてね」と女の子に優しく声をかけて再び店内に戻った。

揺れは少し小さくなったもののまだ続く。僕は避難するようにと叫びながら店内を走り回り、全員外に出たことを確認して僕も避難した。

僕が外に出る頃には揺れは収まっていたのだが、長い揺れだったので、まだ揺れている気がして気持ちが悪い。駐車場にいる人たちは落ち着きを取り戻していた。隣のスーパーからは未だに人がうじゃうじゃと出てきている。その様子を見ながら「ふう」と一息ついたとき、僕の側にスーパーのエプロンをつけたおばさんがいたので声をかけた。

「大きかったですね」

「びっくりしたねえ。お客さん大丈夫だった？」

「ええ。幸運にもあまりいなかったので」

「今日はもう営業できないね。後片付けしないとダメだわ」

「そうですね。今晚中に終わるといいんですが」

「みんな残業だね。お兄さん店は一人なの？」

「一人です。どうしましょうか」

「とりあえず店閉めておいたら？そのうち店長さんくるんじゃない？」

「そうしますかね」

「さあ、落ち着いたみたいだから戻ろうかね」

おばちゃんは「あ～あ、やれやれ」と首を回しながら店内に入っていった。避難したお客さんもパラパラと帰りだしたので、僕も店内に戻った。

閉店間際にデカイ仕事が出来てしまった。店長に連絡しようかと思い電話を手にしたのだが、回線が混んでいるのか繋がらない。仕方なく目に付いた物から棚に戻すことにした。荒れ果てた店内。入り口にあった商品は四方八方へ散らばっている。恐らく逃げ惑うお客さんに蹴飛ばされ

たのだろう。陶器類は半分以上割れてしまっている。お客さん達はみんな家に向かったようなのだが、手に持っていた商品はどこに置いたのだろうか。外にカゴを持ち出していたおばちゃんもいたし、ジッパーさんも2つほど「ジッパー」を持っていたような気がする。みなさん、商品はどこですか？

入り口付近の商品を片づけていると「大丈夫だった？」と声がした。店長だ。メシア登場。

「ええ、大丈夫です。店長は自宅にいたんですか？」

「いや、その辺で買い物をしていたのよ。ビックリして真っ直ぐここに来た。家はどうなってるかわからないけど。お客さんはみんな無事に逃げたの？」

「そうですね。怪我した人はいないようでした」

「そうかあ、よかったあ」

「でも手に持っていた商品をそのまま持って帰った人もいるかもしれません」

「そうだよねえ。多分家に帰ってから気が付くんだよね。とりあえず今日は店を閉めて出来る分片づけよう」

店長は自動ドアを閉め「CLOSE」の看板を出した。

僕は店長が来たことにより、気持ちが楽になった。緊張の反動が一気に押し寄せてきて大きいため息をついた。

「一人で怖かったでしょ？」

「今時間差で疲れがきました」

店長と笑いあっていると携帯電話が鳴った。メールが届いている。

タイトル 家は大丈夫です。

本文なし

母からのメールだ。僕の母は、一言だけメールを打つときは何故かタイトルに入れる癖がある。

タイトル タイトルに本文いれるなよ

本文 店を片付けてから帰ります。

メールを返信して一安心していると、店長の携帯電話も鳴りだした。電話回線が落ち着いてきたようだ。店長は「大丈夫だった？」とか「今店にいるのよ」などと一通り話をし、電話を切った。

「ご家族ですか？」

「うん、家はなんともないって」

「よかったですね。僕もさっきメールが来ましたけど、大丈夫らしいです」

「川島さん大丈夫かな？」

「大丈夫だと良いんですけどね」

「後で連絡してみないとね」

店長はテキパキと片付け作業を始めた。あの、店長・・・もう一人従業員いませんでしたっけ？

2人で黙々と片づけていると、店を心配した川島さんが駆けつけてきた。非番だったため家でのんびりしていたのだろう。慌てて化粧したのか若干荒い感じがする。「凄かったね」「震度6だったよ」「陶器滅茶苦茶だねえ」などと会話をする。

店内全体を見た感じでは幸いにも損害は陶器類くらいで、明日から普通に営業出来そうだ。「そういえば相沢さんどうなったかな？」

店長が口にする。ようやく思い出したか・・・。

「家でパニックになってるかもしれませんね」

と川島さん。

「相沢さんだったらお客さん放って一人で店の外に逃げそうだよね」

「でもパニックになって店の中走り回ってるかもしれませんよ。みんな逃げたのに」

「あー、それはあるね。危険なタイプだよね」

「そういえばあの缶詰全部持っていたんですか？」

「うん、持って行ったよ。『なんとかして食べます』って言ってた」

「えー、あれ全部どうやって食べるんですかねえ」

「スイートコーン山盛りのサラダ作るんじゃない？」

「ご飯の代わりにスイートコーン食べていそうですね」

「ははは、やめてよ川島さん。」

僕は2人の会話を黙って聞いていたが、何故かスイートコーンの缶詰を片手に、店内を走り回る相沢さんの姿が頭に浮かんでしまい少し笑ってしまった。

ようやく店内が片付いたのは9時5分前で、明日からは通常営業できる状態になった。傷が付いたり凹んだりした商品が結構あったのだが、残業代としてそれぞれが持って帰ることにした。

僕は潰れたティッシュボックス2個と折れた板チョコ、パッケージが壊れたきのこの山を選び店を出た。

ちなみに相沢さんの分はもちろん無かった。

なんだか偉そうな人がいる。部下らしき男を引き連れて、店内をグルグル回りながら何か指示をしている。偉そうにしゃがって。何様のつもりなんだろうか。お前誰だよ。ようやくレジに来たかと思ったら手には何も持っていない。相変わらず偉そうな態度だ。

「いらっしゃいませ」

「はい、いつもどうも」

何が「いつもどうも」だ。お前など知らんぞ。何の用だ。

「君が西川君か。良く働いているそうだねえ。店長が誉めていたよ」

ん？ どういうことだ？ 僕は混乱した。脳が高速で動き出す。KIYOSHIツインカムが吹け上がり、一つの可能性を見つけた。こ、この人はもしや。

「今日店長は休みかね？」

間違いない！ この声は、時々電話で聞く社長の声ではないか！ 偉い人ではないか！ 社長様じゃないか！ 僕は全身の血の気が引くのを感じた。

「いえ、夜のシフトで、入っております」

僕は言葉に最大限の注意を払って返答した。

「おお、そうかそうか。では宜しく言っておいてね」

「はい、かしこまりました」

「じゃあ行こうか」

部下と共に店を出る男性。

「ありがとうございました！」

社長に実際に合うのは初めてだった。店の視察に来たのだろうか。僕は社長が店内に入ってから自分の勤務態度を振り返った。しっかり笑顔で声を出していたし、手が空いたときは商品の整理もしていた。普段ならレジで突っ立って軽くサボっていたと思う。しかし今日は幸運にも乱れている売場があったのだ。荒らしてくれてたお客さんに感謝しなければ。

先ほど社長が「店長が誉めていたよ」と言ったのを思い出した。僕がサボることは店長を裏切ることになる。あんなに優しい店長を裏切るわけにはいかない。僕は初心に返り、仕事に励むように気を引き締めた。

次に入店したお客さんには精一杯心を込めて「いらっしゃいませ」と言おう。即実行するのが僕の良いところだ。

自動ドアが開いた。

「あ～！ 今日涼しいねえ！」

入ってきた紫の髪と他2名を見て、一気にやる気を無くした。いつもの3人である。思わず「いらっしゃいませ」と力のない声が出そうになったが、もしかすると帰ったふりをした社長が陰でこっそり見ているかもしれないという可能性が頭を過ぎる。

「いらっしゃいませ！」

笑顔で元気良く声を出し頭を下げた。

「あらお兄さん、今日も素敵だわね。がはははは」

安っぽいサングラスをかけた麦藁さんが先制攻撃をしかける。もはやどうにでもなれ。

パンチー事件以来彼女らは常連客になり、週に1度は来店するようになった。アロハさんは流石にアロハシャツばかり着ているわけにもいかず、暑さのピークが過ぎた頃にはアロハシャツは見れなくなった。今日はスパンコールが散りばめられた真っ赤なワンピースを着ている。ところで彼女らが頻繁に来店するようになって一つ気がついたことがあった。いつも麦藁帽子を装備している麦藁さんだが、麦藁帽子を数種類持っているのだ。一見同じように見えるのだが、編み具合や縁のラインの柄や色が若干違うのである。僕が確認したところでは少なくとも5種類は持っているようだ。中々のお洒落さんである。

紫パーマさんはここ最近、自分の買い物が終わると他の2人を待つ間ずっと話しかけてくる。今日は特に買うものがないのか入店直後に僕の目の前に来て近況報告を始めた。よくもまあこんなに話題があるものだと関心する。答えても答えてもマシンガンのように次々と発せられる話題。まるでナンパ師である。僕のスタミナはどんどん減っていく。話のネタが切れた隙に、売場に目をやって「あら、あそこ直さなきゃ」と呟き、紫パーマさんから離れた。特に直す必要もない売場を整理しているふりをする。紫パーマさんは「なんでも100円〜♪」と鼻歌を歌いながら、再び店内を歩き出した。

そのうちにフィリピーナさん達が来店し、さらに店内は賑やかになった。しかも今日はナタリーさんという新しい人を紹介された。ナタリーさんは僕の噂を色々聞いていたようで、紹介されると手をヒラヒラと振って「ハイ、ニシカワサン。アイラビュー」と挨拶された。それを見ていたジェニファーさんは負けじと「ワタシモ、アイラビューネ」と言う。僕は最高のさわやかな笑顔で「サンキュー」と応じた。

フィリピーナさん達はいつもカゴ一杯の買い物をしていくのだが、スナック菓子やカップ麺などは滅多に買わない。美しいスタイルの秘密はそこにあるのだろうか。

レジに立っていると新顔のオバチャンが会計に来た。何か嫌なことでもあったのだろうかと思うような仏頂面をしている。こういうお客さんは苦手だ。

「315円になります」

商品を袋に入れて、オバチャンが財布から小銭を出すのを待つ。手にしている財布をチラリと見るとシャネルのロゴが入っていた。中々のお洒落さんだ。ならば着ている服もブランド物なのかと思い、失礼ながらチラリと視線を動かした。白いシャツに赤いシンプルなカーディガン。胸にはシャネルの文字。

おや？僕は何か違和感を感じた。もう一度服を見る。白いシャツに赤いシンプルなカーディガン。胸にはシャネルの...シャネルの...あれ？

「SHANEL」

僕は横綱の張り手をモロに食らったような衝撃を受けた。こんな凄いシャネルがあったとは。もしかするとシャネルのロゴよりも「シャネル」なのではないか！？こうなるとあの財布が非常に怪しい。じっくりと確認したい衝動に駆られたのだが、オバチャンは315円を受け皿に置くと、商品が入った袋を手にしてレシートも受け取らずさっさと出入り口に向かって行ってしまった。

果たしてあの財布はCHANELなのかSHANELなのか。気になって仕方ないので家に帰ったら「SHANEL」グッズをインターネットで検索してみようと思い、スマートフォンを取り出してToDoリストに「SHANEL検索」と打ち込んだ。

そんなところで店長が出勤してきたので、社長が来たことを伝えた。

「あら、そうなんだ。何かしていった？」

「店内を色々調べてましたよ」

「嫌だなあ。後で色々と言われるんだよねえ。とりあえず電話入れておこうかな」

店長はやや渋った顔をして、電話を手に事務室へ行った。しばらくして戻ってきた店長は表情が明るくなっていた。

「何か言っていました？」

「うん、少しだけね。あのね、社長が西川君のこと誉めてたよ」

「え？」

「雰囲気の良い人だって言ってた。よかったね」

僕は胸を撫で降ろした。いつも通りに接客していたのだが、何か不味いことでも言われたらどうしようかとハラハラしていたのだから。店長の面子も保つことができたようだ。

「当店のエースですからって言っておいたから」

柔らかな笑顔を浮かべながら言う店長。何故ハードルを上げる。次に社長が来たとき少しのヘマもできないじゃないか。

ちなみに社長が偵察に来た時は、後ほど報告書が届くらしい。それには店内の様子や従業員の対応についての評価が書いてあるという。果たして今回の僕の評価はどのようになっているのだろうか。眠れない日々が続くような予感がした。

店長がレジをするというので、僕は担当コーナーの品出しや整理を始めた。今日は入荷した物が多いのだが、出すスペースが無い。ゴミ取り用のコロコロローラーなど有り余っているのに、また新しい物が入ってきてしまった。しかもスペアの形状が独特なため、現在並べているローラーのスペアとは別に並べないといけない。こういう商品はやや大きめの一般的なサイズと小さいサイズの2種類あれば十分だと思う。独自の形状の種類が多ければ多いほど替えのローラーを置く場所も必要になるし、買う方としてもどの替えローラーが商品に合うのか悩んでしまうだろう。これについて尋ねられることが多くあり、非常に面倒である。中には替えローラーはあるものの、本体が無かったりする物もある。商品を入れ替えするとき、本体を新製品と置き換えるのは簡単なのだが、旧製品を買ったお客さんのためにも替えローラーは残しておかないといけないからだ。T字型のローラー本体と、替えローラーが2つはいった四角いパックを無駄のないように組み合わせてぶら下げていく。まるでテトリスのようだ。Z型があつたら難易度は跳ね上がるだろう。

なにやらレジのほう賑やかになっているので目を向けると例の3人組とフィリピーナさん達が並んでいた。店長1人では大変なのでレジの応援に駆けつける。

「お待ちのお客様こちらへどうぞ」

空いているレジを解放するとフィリピーナさん達が我先にとやってきた。やはりそうなるか。

どさりと置かれたカゴには目一杯の商品が詰め込まれている。一個ずつ取り出し数えながら別のカゴに移していくのだが、数えている途中で「ニシカワサン、イイテンキデスネ」などと話しかけられるので厄介だ。いくつまで数えたかわからなくなるではないか。しかも1人が話かけると、私も私もと次々と参戦してくる。

「42点で4410円になります」

5000円札を差し出されたのでレジに打ち込み590円のお釣りを渡そうとしたらジェニファーさんが先頭で掌を出して構えていた。その上にお釣りを置こうとした時、手をギュッと握られ驚いて顔を上げるとジェニファーさんがニコリと微笑みウィンクをした。その瞬間目からハートや星のようなキラキラしたものがパァッと空気中に飛んだ気がした。

「ありがとうございました」

彼女たちを見送る。

「新しい会員さん？」

隣のレジにいた店長がこちらを見ていた。お客さんは捌ききったらしい。

「そうみたいですね」

僕は軽く笑った。

「西川君のファンクラブって結構売上に貢献してるわよね」

店長曰く、僕がここで働き始めてからフィリピーナさん達の来店頻度が上がっているらしい。「もし西川くんここ辞めたら彼女たちガッカリするだろうねえ。店の売上もガクッと落ちるだろうし。」

なんだこのプレッシャーは。

「大丈夫ですよ。まだ辞める予定はありませんから。」

僕はレジのキーを抜いた。

辞める予定はない。というのは本心である。この仕事は楽しいし従業員にも恵まれている。いや、1人問題があるが。しかしそれもまた仕事を楽しくさせてくれるスパイスでもある。時には嫌な感じのするお客さんもいるがそれは仕方のないことだし、フィリピーナさん達のように明るくしてくれる人たちもいるし、紫パーマさん達もそれほど嫌いというわけではない。なんだかんだ言いながらも僕はこの職場が好きなのだ。

店長。この店、楽しいです。

夏もすっかり終わり、秋まただ中である。店内も紅葉を彩った紙などを飾り秋の演出をしている。自動ドアが開き、黄色いバンダナを巻いたオジサンが入ってきた。

「いらっしゃいませ」

時計の針は17時を指している。日が暮れるのも早くなった。この季節は人肌が恋しくなるのは何故だろう。誰かに寄り添っていたいような、異性の体温の温もりを感じていたいような気持ちになる。

そんな切ない思いを、学ランを着たニラのようにフネフネした男が僕の目の前で叶えている。タマゴのようなツルツルの肌をした可愛らしい女子校生と手を繋ぎ、いや手を絡めあい、店内をウロウロしながらキャッキゃとはしゃいでいるのだ。ニラ男は頻りに「ヤバくね、これヤバくね」と口にはしている。何がヤバいかわからないが、当店にある「ヤバい物」は相沢さんくらいだ。

本日相沢さんは12時から17時までの勤務で先ほど帰ったばかりだ。これといって大きな問題は起きなかったが、レジの中には誤打レシートがたっぷりと収まっている。そのほとんどが「数え間違いのため」だ。メガネの度数が合っていないのかもしれない。乱視がだいぶ進行しているのではないだろうか。「なんでこんなに間違えるのかしらねえ」と店長はいつも困っている。

「いらっしゃいませ」

秋風とともに入ってきたのは立派な顎髭を生やした初老の男性だった。髭の長さは20cmほどはあるだろう。初めまして、関羽様。ニラ男も関羽様に気づいたらしい。「あの髭ヤバくね」と小さな声で言ったのを僕は聞き逃さなかった。関羽様、こいつ斬っていいですよ。タマゴは僕が頂きますが。

関羽様はニラタマカップルに気付くこともなく衛生用品売り場の方へ消えていった。その先、通路に対して横に設置された商品棚の上部から黄色いものがチラチラと見える。先ほど来店したバンダナオジサンも衛生用品売り場近辺にいるようだ。しかし黄色いバンダナとはこれまたお洒落なオジサンである。

黄色いバンダナ・・・黄巾。

張角様。

なんということだ。関羽様と張角様が今奇跡の再会を果たそうとしている。ニラ男よ、確かにヤバいかもしれない。僕は関羽様が歩いて行った方へ忍び寄った。奇跡を見逃す訳にはいかない。通路を真っ直ぐ進む関羽様の先には張角様の待つ売り場がある。商品棚の上から見えていた黄色いバンダナが通路の方へ動いていくのが見えた。これ以上ないタイミングだ。そしてついに2つのターゲットが通路で重なった。

「おっ、と」

張角様が一步引くのと同時に、関羽様も半身避けて再び歩き出した。

果たして歴史に偉大な影響を与えた2名の再会は幕を閉じた。その言葉、「おっ、と」。過去の武勇を語り合う事に多くの言葉など必要ないのだろう。

さて、その張角様が会計に来た。差し出されたのは絆創膏1箱と炭酸飲料、そして沢庵漬け。さすが張角様だ。

僕は手早く会計をし、立ち去っていくその勇姿を見送った。

一方関羽様はというと、彼もまた絆創膏を手をしている。もしやあの「おっ、と」の一瞬で彼らは電光石火の如く刃を交え互いに傷を負ったのか。恐ろしい人達だ。若者が挨拶代りに「へーい」とハイタッチをするように彼らは刃をバシッと交えるのだろう。その際の多少の傷は致し方ないということなのか。というのは勿論冗談だ。関羽様が絆創膏を持っているのは事実だが。

スナック菓子を手にしたニラ男と、缶ジュースを2つ持ったタマ子がレジの前に立った。

「3点で315円になります」

ニラ男が財布を取り出し、それが当然と言わんばかりにタマ子は眺めている。会計は基本的に男が負担という考えなのだろう。

「ヤバ、300円無いわ」

ニラ男が財布から200円取り出した。お前ヤバすぎ。

「ええ、何円足りないの？」

「んとねえ、じゃあ100円出して」

端数の15円をトレイに置きながらタマ子に言う。

「じゃあ貸すから」

タマ子が財布から100円取り出してトレイの皿は無事315円になった。

「貸すんだからね。ちゃんと返してよ」

タマ子はケチらしい。100円くらいいいじゃないか。

「100円くらいいいじゃん」

僕の心の声がニラ男の口から出た。

「たかが100円、されど100円」

タマ子の言葉に僕は胸を貫かれた。そうなのだ、されど100円なのだ。100円ショップにおける最も重要なことではないか。100円ショップの店員という身分で「たかが」などと思った自分にガッカリである。

レシートを差し出すとタマ子が受け取り、ニラ男が袋を持った。そして再び手を絡め合いながら店を出て行った。

「店員さーん」

おっと、お呼びだ。店内には関羽様しかいない。

「はい、なんですか」

関羽様。と心で加える。

「ホッカイロないべが？」

もちろんある。なんでも揃う店なのだから。

「はい、ございます」

あなたが手にしている絆創膏のすぐ近くにあったのですよ。僕は売り場へ案内し「こちらになります」と掌を向けた。

「ああ、ここか」

関羽様が手にした商品、その名も「ホッカイロウ」。北海道とかけたのだろう。パッケージには北海道の絵があり、中心からポンと飛び出すようにポップ体で「ホッカイロウ」と書かれている。ちなみに4個入りだ。

「寒くなってきたからね、これないど酷くてね」

寒がりの関羽様。

「4個入りか、1日で無くなってしまふな」

それは使いすぎだろう。いや、1人で使うわけではないのかもしれないが。

関羽様はホッカイロウを3パックほど手にし、違う売り場へと向かっていった。その間にポツポツとお客さんが入店し、店内は少し賑やかになっていた。時刻は18時5分。部活帰りの学生や仕事帰りの会社員で店内が混雑する時間帯だ。

僕はレジへ行き会計に来るお客さんを待つことにした。

そういえば以前社長が偵察に来た時の結果であるが、数日後レポートが届いた。3枚ほどの紙には店内の雰囲気、陳列状態、従業員の態度などのチェック項目が細かく記されており、それぞれがABCの3段階で評価されるようになっていた。従業員の態度に関しては自分自身の評価であるが、陳列状態などに関しては各売り場の担当の責任でもあるため、全ての項目で高評価をもらうのは難しい。常に従業員が3人程いるなら良いのだが、あの時僕は1人だった。1人で店全体をカバーするには限界がある。さて気になるその結果だが、店内の雰囲気はオールA。従業員の態度、つまり僕の接客態度だが、これもオールA。陳列状態には5項目中2つのBがあった。最後に社長の直筆でコメントが書かれている。「店内に入るとすぐに挨拶が聞こえ、活気が出ていた。従業員は常に良い表情をしながら品出しや陳列整理などをしていた。販売意欲を刺激するようなPOPが多くあり工夫を感じた。レジ前の棚をもう少し整理しておく尚良い」とのこと。レジ前の棚。そう、相沢ワールド満載の棚だ。そこだけは見られなくなかった。僕はコメントをみて悔しい思いに駆られた。恐らく陳列状態の2つのBもレジ前のことだろう。

レポートは従業員全員が目を通す事になっているので、店長はレポートを見るなり即刻レジ前を片付けた。相沢ワールドはついに消滅したのだが、長い月日をかけて再び築き上げられることだろう。既に土台が完成しつつあるが。

最近社長から店長へ電話が来たらしく、来月から僕の時給が30円上がることになった。店長の推しと社長の偵察で僕の業績が認められたのだ。これにて就業時から時給据え置きである相沢さんを早くも抜き去ったわけである。ちなみに偵察の際に相沢さんがいたときのレポートは無残なものでちょっとした伝説になっている。

19時15分。

閉店まで45分。お客さんもまばらになったので店内の掃除をすることにした。掃除は始まりそれが45分前。閉店まで45分。閉店まで45分。閉店まで45分。脳内でジュリーがリフレインする。床をモップで拭きながら陳列を直し、途中お客さんに物を尋ねられたりしながら店内ひと通り回った。外でなびいている「100ショップ スマイル」の旗を取り込み閉店の準備は完了した。

レジにて20時を待つ。残り25分だ。

自動ドアが開くと、野球の練習着を身にまとった学生が5人ほど入ってきた。しまった、今日は夜練の日か。ナイター設備のある近所の野球グラウンドでは時々夜練が行われている。その帰りがてら当店に寄っていただくのは嬉しい限りなのだが、なにせ練習着のままなので彼らの動線にはグラウンドの土がパラパラと落ちていくのだ。その後再び掃除をしないとイケないため、二度手間を避けるためにナイターの灯りが点いている時は掃除の時間を少し遅らせるのだが、本日はうっかりしていた。彼らは彼らなりに、店内に入る前にポンポンと服を払ったり背中を叩き合ったりゴンゴンと靴の土を落としたりして店側へ気を使ってきている。そういう面を見ているため当然怒るわけにもいかず、むしろ彼らのモラルに暖かさを感じたりする。

野球部5名はスポーツドリンクと文房具などを購入し夜闇へ消えていった。僕は彼らの通った後モップでなぞった。自動ドアまで拭いた時、時計がちょうど20時を指していたのでそのままドアの鍵をかけた。ドアにぶら下がっているOPENの板をCLOSEDにしレジの精算をする。

精算業務をし、業務日誌を書き終えるのは大体20時30分ころだ。業務日誌のコメント欄に何を書こうか毎度のごとく迷う。「特になし」は厳禁であり、必ずなにかしら書かないとイケない。僕はしばし考えた後「ホッカイロが売れ始めました。在庫及び発注チェック」と書き日誌を閉じた。事務室の灯りを消し、閉店時のチェック項目それぞれに印をつけ、警報機のスイッチを入れて店を出た。警報機が作動するまで30秒の猶予がある。事務室から外へ出てドアを施錠しドアノブを回しガタガタと揺らす。施錠完了。警報機の手動を告げる音が止むと辺に静けさが漂った。秋風が冷たく、ボンヤリとした街灯が少し寂しい。

僕は車に乗り込み家路を後にした。

お婆ちゃんに頼まれていたヘアピンを思い出したのはその5分後だった。

緊急会議が開かれている。

僕の正面で店長が真剣な顔をして座っており、その右隣に同じく真剣な顔をした川島さん、そして左隣には無表情の相沢さんがおり4人で向かい合うようにして座っている。それぞれの手には一枚の紙が握られている。

「ですので、どうしても避けられないとのことでした。」

店長は声を落とした。手にした紙には本社の運営方針と当店の3年間の売上が記されている。

この店の売上が良くないのは十分に知っていた。ここ数ヶ月もの間本社からのノルマを達成できていない。事務室に貼られたグラフは赤い文字ばかりだ。そんな状態にある店は当店だけではなく、他の店舗もらしい。

100円ショップがまだ珍しかった頃に当店の本社が設立され、第一号店が県の中心部に作られた。流行りとともに業績を伸ばした本社は次々と店舗を増やし、県内に10数店舗を構えるようになった。やがては隣県にも出店して支社を作りどんどんエリアを広げていく予定だった。その準備をしている頃、ある株式会社が全国展開を目的とした100円ショップ「ワンハンドレッド」を設立した。東京都内で知名度を高め、半年後には札幌と福岡に支店を置いたかと思うと大阪、名古屋、弘前、仙台と瞬く間にエリアを広げていった。

当然、「ワンハンドレッド」はこの店のエリアにも進出してきた。オープンしたばかりのころは予想通り客足は遠のいたが、「やっぱりこの店の方が質が良い」というお客さんが戻ってきたので一時的に落ちた売上は8割ほど回復した。しかし知名度、店舗数、商品数すべてにおいて「100円ショップ スマイル」は「ワンハンドレッド」に負けていた。やがて100円の商品に質を求めなくなったお客さんが増え「質より量」つまり「選ぶ楽しさ」を求められた。「量より質」を取っていた当店の本社の経営方針はコンシューマーに合わず、業績は徐々に下降していった。

なんとか粘っていたものの復帰の目処が立たず、ついに本社が傾き始めた。そこでまずは店舗数を減らすという案が持ち上がったのだ。

「ですので、まず今の売り上げの120%ほどを維持していかないことには早い段階でこの店が閉店することになります」

「120%かぁ…」

僕は思わず声を漏らした。

鈍った客足を元に戻すのは簡単ではない。しかもこの時勢だ。

「あっちは品数多いですからねえ」

うーんうーんと首を傾げる3人だったが、相澤さんだけはケロリとしていた。「お前も何か言えよ」と思った時、僕の心が通じたのか相澤さんが口を開いた。

「ダメじゃないですか、もう」

実に簡略でわかりやすい。まさにその通りなのだが、どう考えても今言っただけの言葉の一つだ。これには店長も怒った。

「そりゃ、ダメかもしれないけど。そんなに簡単に片付けるんですか。どんな思いでこの店を築いてきたと思っているんですか。なんですか、その『ダメ』って。」

涙声で言葉を詰ませた。このまま放っておくと「相沢さんのせいでお客さんが流れていった」などと言いかねない。今店長と相沢さんに亀裂ができてしまうと今後の営業に支障がでてしまう。「まあまあ」と宥めようかと思ったのだが、相沢さんがいないほうが上手くやっていけそうな気もしたので、ここは今までのストレスを晴らすが如く店長に加担しようかと思った。

「相沢さんはいつもそうやって他人ごとなんですよ」

いや、これは僕が言ったのではない。川島さんだ。真っ赤に染まった目が鋭くなっている。

「私、いや私達がどれだけ相沢さんのせいでクレームを受けたか知っているんですか」

ああ、言ってしまった。やばい。やばいのだが多分止められない。でも止めなければならない。男として。

「まず」

声を張って言ったものの、続けて何を言おうか考えていない。久しぶりにKIYOSHIツインカムがレッドゾーンまで回った。

「僕はこの店が好きですし、今後も働きたいと思っています。このノルマは確かに厳しいです。でもこの経営状態ではそうせざるを得ないのでしょう。なので、とにかく我武者羅に一生懸命やりましょうよ。もがいてみましょうよ。」

店長は頷いた。うむ、我ながら無難な台詞だったはずだ。川島さんは...と、相沢さんを睨んでいる。相沢さんは...と、丁寧にも川島さんの視線を受け止めている。そして口を開いた。

「明日からハローワーク通わないと」

川島さんがボタンと椅子を倒して立ち上がった。

「ふざけないでください」

これまで聞いたことのないほどの強い口調だ。

「あ、あの、やめましょう。そういうの」

僕は慌てて熱い視線の間に顔を滑り込ませた。

「店長、明日から私のシフト変えてください。もうこの人と仕事したくありません」

「いいえ。私が明日から来なければいいだけでするので変える必要はありません」

「ちょっと、何言ってんですか。ここまでやってきたじゃないですか。最後までみんなで仕事しましょうよ。ね、店長」

僕は店長に助けを求めた。

「もう仕事できそうにないので帰ります」

相沢さんはバッグを持ちスタスタと出て行った。事務室のドアがパタリと閉まる。

「あー、腹立つ」

川島さんは煙草を取り出し火を点けた。

「でもすみません、店長。めちゃくちゃにしてみました」

店長は「いえ、怒って当然です」と軽く笑った。

「今すぐに出る対策ってなんですか」

僕は努めて冷静に言った。

「んー、広告かな」

「広告は結構経費がかかりますよ」

「この店と『ワンハンドレッド』の違いを知ってもらえればねえ...」

「いや、もうお客さんは知っていると思います。でも多少質が悪くても100円だし『ワンハンドレッド』は種類も多いってことであっちに行っちゃうんですよね」

これはもう3人とも十分に知っていることだった。しかし何か打開策があるはずだ。こちらにあって、あっちにないもの。それは何だ。商品の数は劣っている。知名度も劣っている。接客サービスはトントンだ。唯一胸を張れる「商品の質」。これを武器にするしかない。他に何か無いか...考えろ！考えるんだ清志！！

「西川君」

そうだ考えろ清志。お前なら何か良いアイデアを出せるはずだ。

「西川君」

僕は西川清志。24歳独身。彼女いない暦8年。年収ギリギリ3桁...

「西川君ってば」

パシン！という音でふと頭を上げると川島さんがこちらを見ていた。

「呼んでも反応しないんだもん」

どうやら手を叩いて音を出したらしい。

「店長、西川君使いましょうよ」

僕を使う？一体何を言い出すのだろう。

「あっちになくてこっちにある物を考えてみたんですけど、それって西川君じゃないですか」

僕は物ではなく生命体なのだがそこは別にいいとして、僕をどうしようと言うのだろう。

「あー、いいかもね」

店長も何かに気づいたらしく川島さんと「ね」と目を合わせて微笑んだ。

「この辺の100円ショップってみんな女性店員でしょ、中年の。私たちはいつも西川君を見慣れているから違和感なかったけど、若い男性店員って結構珍しいし中々の武器になるんじゃない？しかも割とイケメンだし」

割と、は余計だ。しかし確かに100円ショップで働く若い男性店員というのは珍しいのだ。

「な、なにをすればいいんでしょうか」

戸惑う僕に店長は「んー」と首を捻り、

「とりあえず、『イケメン店員がいるお店！』みたいなコピーを書いてチラシを配るとか」

「そうですよね。『イケメンスマイルをお届けします！』とか」

「そうそう。『10点ご購入で写メールが撮れる』とか」

「写メール！いいですねそれ！」

「フィリピーナさんたち大喜びしそう」

「もう毎日くるんじゃないですか」

どうやら盛り上がっているらしい。

「早速何かやりましょうよ、店長」

「大きなポスターを入口に貼ろうかしら」

「等身大のパネルとかいいんじゃないですか？」

「あー、いいね。そのパネルの横で写メール撮れるとか」

「また写メール！」

「ということで、西川君」

「はい！」

あきれていたところで名前を呼ばれ思わず体を硬直させた。

「とりあえず広告に西川君載せます」

「命令ですか」

苦笑いする僕に店長が少し哀しそうな目をした。

「最後の手なのかもしれないのよ。本当にこれしかないと思う。だからお願いします」

店長が頭を下げた。それにつられて川島さんも「お願いします」と頭を下げる。

もう引き返せない。

わかっている。「100円ショップ スマイル」の命運は僕にかかっているのだ。

「わかりました」

僕は立ちあがった。

「ガンガン僕を使ってください。頑張りましょう」

もうどうなってもいい。殆どヤケクソになって胸を張った。

こうして「ワンハンドレッド」との熱い戦いが始まった。語り継がれるわけでも無く、Wikipediaにも載らない、小さな小さな戦いかもしれないがやってやろうじゃないか。

「おはようございます」

事務室のドアを開けると店長がパソコンに向かっていた。パソコンの隣に「誰でも簡単チラシのつくり方」という本が置かれている。どうやら早速何かを始めたらしい。カタカタとキーボードを叩く店長をよそに「誰でも簡単チラシのつくり方」を手を取った。DVD付きだ。収録されているDVD-ROMを使えば色んなテンプレートやデザインや模様が使えるのだ。あとはスペースに文字を打ち込んでいけばあっという間にチラシは出来上がる。さて、店長はどんなチラシを作っているのだろうか。店長が操作するパソコン画面を眺めた。

【100円ボーイ キヨシと逢える！】

一瞬で不安になった。「会える」ではなく「逢える」にしているのが気になる。

「あの、店長」

声をかけると「どう、こういうの」と得意げな顔を向けてきた。

「どうって。100円ボーイですか、僕」

「なら100円GUY? 100円マンじゃ変でしょ」

いや、そこじゃないです。

「だからボーイでいいのよ。で、この部分に西川君の写真入れたいのね。今日お洒落してきた？」

100円ボーイになっただけの僕は、いつものように当たり障りのない無難な格好だ。

「エプロン着けるから服はあまり関係ないかと」

「あ、そうだよね」

店長は「じゃあ写真撮るね」と立ち上がるとロッカーを開けた。さてどのような写真を撮られるのだろうか。品出ししながら顔をカメラに向けてニッコリと微笑むような画だろうか。

「じゃ、店で撮ろう」

背後から聞こえた声に振り向くと店長の肩には一眼レフがぶら下がっており、足元の黒いバッグには2、3本レンズが入っていた。

「イ、、デジイチって、それ店長のですか？」

「まさか。旦那の借りてきたの」

大口径レンズじゃないですか、店長。僕はある程度カメラに詳しいので分かる。今店長がぶら下げているカメラは一眼レフというもので、そのなかでもデジイチという分類の物だ。ここまでは大抵の人は分かるだろう。しかしそのカメラがかなりの品物だ。しかもついているレンズがヤバい。大口径のゴツいレンズに赤いライン、白で書かれた24-70mm、そしてウルトラソニック...

「店長、あ、そのレンズについて旦那さん何も言いませんでした？気をつけろよとか」

「ん、あーこれ黙って借りてきたからね。良いやつなのこれ、高いの？」

それは「借りてきた」とは言えないと思う。店長そのレンズはLレンズっていうやつで、そのバッグに収まっているレンズもたぶんヤバいです。

「傷付けないようにした方がいいですよ、ええ」

やんわりと忠告しておいた。

カメラという分野は興味の無い人にとっては理解しがたい部分がある。カメラに対して「撮ればいい」としか思っていない人にとって、本体やレンズに何十万円、何百万も費やすなんて考えられないだろう。よってカメラの世界では、家庭の財布を握る奥さんに対してカメラやレンズの価格を秘密にしている夫は多数いる。店長の旦那さんも例外ではないのだろう。店長には「なぁに安物さ」などと言ってるのかもしれない。だからこそ店長は「安物だから勝手に使っても良いか」と思ったのかもしれない。もしここで僕がレンズの値段を言ったら店長の家庭を揺るがす大問題になりかねない。ここは思い切って知らないふりでいくしかないのだ。

「さて行きますか」

神妙な顔をしている僕の思惑など知らぬ店長は事務室から店へと繋がるドアを開けた。通りがてらドアにレンズがガコンとぶつかる。

「あっと。まったくこのカメラ邪魔だね。大きいし重いし」

背中に嫌な汗が流れる。価値がわからないほど恐ろしいものは無い。

「さて、じゃあ店の前で一枚撮ろうか」

僕は「はいわかりました」と出入り口から外へ出た。店長はデジイチを手に持ちクルクルと見回し「あ、これか」とスイッチを入れた。

「これはこのままでいいの？」

モード切り替えのダイヤルを僕に見せる。プログラムモードになっていたので「全自動モードにしておけば大抵なんとかなります」とダイヤルを回し四角いマークに合わせた。

「いろんな機能があるとなんだか分からないんだよね。普通に撮ればいいだけなのに」

やはり店長はあっち側の人間らしい。

「あとはシャッター押せば撮れるの？」

「半押しするとピピッって音がしてピントが合うのでそのまま押しこめばオッケーです」

「撮ったのはここに映るんだよね」

店長はモニタを指差し一人で頷いている。

「はい。じゃあ西川君そこに立って。笑顔でね」

指を差された場所へスッと移動しカメラを構えた店長を見る。

「あれ？」

「店長、レンズカバーついたままです」

店長はレンズカバーを外そうとカチャカチャやっていたが、なんとなく危うい予感がしたので僕が外し、ついでに上手い具合にファインダーに収まるようにズームの幅を調整した。店長はふたたびカメラを構える。

「はい、笑って」

僕は精いっぱい笑顔をした。パシャリと音がし店長はモニターを見る。「ううん、もう一枚かな」と納得がいかない様子だ。

「もう一枚撮りませう。はい笑ってー」

パシャリ、パシャリとシャッターが切られる。僕はずっと笑顔のまま固まっている。

数枚撮ってようやく納得ができたらしく「よし、次は中だね」と勇み足で店内に入って行った。

一方、僕がカメラの護衛をしている時川島さんはレジ脇にあるパソコンで新しい商品のラインナップを眺めていた。広告をつくるからには何かしらの注目ポイントがないといけない。「100円ボーイ キヨシ」だけでは不十分なのだ。

ということで川島さんが多岐のジャンルに渡って売れそうなものを調べている。100円ショップにありがちなものではなく、「これが100円で買えるのか!？」という商品だ。まず目を付けたのが某大手メーカーのシャンプー、リンスだ。これは以前も取り扱ったのだが非常に反響が良かった。共に180g入の小サイズのものだが市場では700円前後で売られている。それを100円(正確には105円)で買えるのだから反響が良くて当たり前である。もう二度と入荷することはないだろうと思っていたのだが、幸運にも近々本社で大量に仕入れる機会があるらしい。店長と相談した結果、合計で2000個の発注を出した。どのようなルートで手に入れたのかわからないが仕入れ値は98円なので一応元は取れる。これだけでも十分に客を寄せる力があるのだがもう一つ目玉が欲しい。しかし100円ショップで取り扱える商品は限られる。そこで目をつけたのが食料品だ。

自動販売機で120円で売られている清涼飲料水を多く取り扱い、昼の購買層をターゲットにカップ麺の種類も増やすことにした。カップ麺は仕入れ値ギリギリの物が多いがその分仕入れ値の安い商品を紛れ込ませている。そのバランスは店長と相談しながら慎重に調整し、分かりやすいようにデータ化した。仕入れ値が高い物ばかりが売れると非常にまずいのだが大抵はバランスよく売れる。売れ行きに偏りがあつたらすぐに陳列を見直し、少しでも手に取る機会が増えるように配置を調整する。こういう言い方をしたくは無いのだが「いかにお客さんを騙すか」がカギなのだ。

その食料品コーナーの前で現在僕は赤と緑のカップ麺を両手に微笑んでいる。カメラの使い方に慣れてきた様子の店長はレンズのズームインズームアウトを調整し次々とシャッターを切っている。

「このくらいでいいかな」

撮った写真を店長と一緒にモニタで確認した。ズラリと僕の笑顔が並んでおりなんとも不気味である。その中でも群を抜いているのは両手に花を持ち腕を交差させ口にバラの花を啜っている写真だ。様々な角度から撮られているが目線は全てカメラに向けられている。最初はガーデニング用品を撮るだけだったはずなのだが、僕が何気なく造花を手にした時「お、いいね」と店長がシャッターを切った。その一枚が非常に良く写ったらしく店長がいろんなリクエストを出し始めた。その結果、

「もう一枚」

「こっちむいて」

「次これ持ってみて」

「これ啜えてみて」

と徐々に悪乗りしていったのだ。

店長が「パソコンに写真を入れたい」というので僕は事務室へ戻りパソコンとカメラを接続して先ほど撮影した写真を全て取り込んだ。パソコンの画面上に僕の写真が走馬灯のように流れる。

「このフォルダに入ってますので」

あとはご自由にどうぞ。煮るなり焼くなりしてください。

店長は椅子に座り一枚一枚眺めては「うんうん」と頷き、時折「これはあそこだな」「これを下のほうにしよう」などと呟いている。頭の中である程度のレイアウトが出来つつあるようだ。

「やっぱりこれだね。フィリピーナさんたち絶対喜ぶよ」

花を啜えた僕がパソコンのモニタに大きく表示されている。そんな時「店長、このラインナップで良いですか」と川島さんが事務室に入ってきた。パソコンに目をやった川島さんは大爆笑。

「これフィリピーナさんにウケますよ」

「だよな？絶対良いよね？」

「吹き出しで『待ってます！』とか入れると良いんじゃないですか？」

「うん、そうしよう」

店長は早速作成中のチラシに写真を移動させた。

川島さんと店長がチラシ作成に夢中になっているので僕は店内へ戻りレジ業務をすることにした。事務室からはキャッキヤと声が聞こえる。果たしてどんなチラシができるのだろうか。僕は嫌な緊張感に包まれながらも、ちょっと面白いことになるかもしれないという期待もした。

100円ボーイ、キヨシ。

全ては僕にかかっている。

今日は日曜日である。寝ぼけ眼で朝刊取り、挟まっているチラシを確認した。スーパーや電気屋のチラシに紛れて「100円ショップ スマイル」のチラシがあった。

「明後日の新聞にこのチラシ入るからね」

一昨日、勤務を終えて着替えていると事務仕事をしていた店長が出来上がったチラシを僕に見せた。僕の写真は3枚使われており、例の写真もバッチリ載っていた。もちろん「100円ボーイ」も消えていない。ただ、写メールやパネルの件は企画倒れになっただけで少しばかり救われた気分になった。

目玉商品の写真が並べられ、中段にはやや右上がりの「すべて100円！」という文字が大きく書かれている。チラシを眺め家族に見られる前にゴミ箱に棄てた。こんなものを見られたら何を言われるか分からない。僕はさっさと朝食を食べ出勤した。

あの事件から相沢さんは出勤していない。どうやら本気で辞めるようだ。相沢さんがいないので残った店長と川島さんと僕でシフトを埋めなければならずここ数日忙しい日が続いた。その状況でチラシを配布するのはかなり危険なので足踏みしていたのだが、事情を知った本部が他店から一名応援を手配してくれた。勤務歴12年のベテラン選手で大石さんという人らしい。

今日はいつものシフト形式ではなく全員が朝から出勤し、手が空いた人から休憩を挟むようにした。気持ちは初売り商戦のようだ。

事務室へ行くと店長と女性が会話をしていた。体格が大きく身長は170cmはあるだろう。横幅もある。ショートカットの髪はやや赤みがあり年の頃なら40前後というところだろうか。

「おはようございます」

「あ、おはよう。この人が西川君」

店長に紹介され「よろしくお願いします」と頭を下げる。

「この人が大石さんね」

「よろしくお願いします」

大石さんが丁寧に頭を下げた。

やがて川島さんが出勤し大石さんの顔を見て「お久しぶりです」と挨拶をした。川島さんは面識があるらしい。

床を磨いたり窓を拭いたりつり銭を用意したりと開店の準備をしていると入り口にチラホラとお客さんが集まり始めた。自動ドアには今日のチラシが貼られており否が応でも「100円ボーイ」が知られることになっている。開店10分前になると店前にある7台分の駐車スペース全てが埋まった。入り口に行列が出来ることはなかったが駐車している車内で人間がスタンバイしている雰囲気グンと伝わった。電池おじさんはいつもとは違う雰囲気にソワソワしているようだ。おじさん、今日は良い乾電池揃えましたよ。

超目玉商品であるシャンプーとトリートメントはダンボールを開けた状態のまま入り口から一番目立つ通路に置かれている。こういったものはわざわざ陳列するよりもある程度雑に置いた方が売れるのだ。「お一人様何個でも」というPOPも忘れない。

カップ麺に関しては3パターンの売り方を用意した。まず仕入れ価格の高いものと安いものをごちゃ混ぜにしてワゴンに入れた。お得感を大きく感じるものは少し多めにしている。2つ目はそのワゴンの隣に大きなダンボールを用意し、カップ麺が6個袋詰めされたものを溢れんばかりに入れた。ダンボールには「6個で500円」のPOPが飾られている。袋に入っているものは仕入れ値が50円以下の物ばかりなので6個500円で売っても最低でも200円の利益がある。3つ目は通常通りの陳列だ。決して「投売り」ではないというのをさり気なくアピールするのだ。ちなみに目玉商品である赤と緑のカップ麺の隣には少し違うデザインの赤と緑があるのだがこちらは仕入れ値が思いっきり安い。

さていよいよ開店だ。店長の指示により僕と大石さんはレジを、川島さんと店長は商品の補充業務をすることになった。店長が箒の柄を使って自動ドアのスイッチを入れた。

「いらっしゃいませ」

大きな声が店内に響いた。店内がパツと華やかになる。従業員が全員揃って挨拶をするとこんなにも違うものなのかと驚いた。

トップで入店した電池おじさんは少しキョロキョロしながらも真っ先に電池コーナーへ向かった。いつもならすぐに一つ手にしてレジへ来るのだが今日は違った。いつもの電池に手を伸ばしかけてピクリと止め、その隣にある「良い電池」を手にしたのだ。電池おじさんはパッケージを眺め「本物」と判断したらしく、なんと3つも手にしてレジに来た。電池おじさんの購入額の新記録である。

「いらっしゃいませ。3点で315円になります」

僕が袋に入れている間に電池おじさんはサッと財布を取り出し華麗にお金を、、、と、チャリンと音がした。電池おじさんが小銭を落としたのだ。これは珍しい。電池おじさんは目線だけ足元に向け、上半身を曲げず脚だけを曲げて素早くしゃがんで立ち上がった。早い動きでかつ軸をブラさず無駄がない。一瞬だけ電池おじさんの残像が見えた気がして鳥肌が立った。電池おじさんは拾った10円玉をトレイに置き100円玉3枚と5円玉を並べた。

「315円ちょうどお預かりします」

レシートを差し出すといつものようにヒラリと受け取り出入口へ向かっていった。しかし僕は確信していた。電池おじさんはいつもと違う店の雰囲気、いつもと違う陳列、いつもと違う合計額に100%戸惑っていたのだ。

電池おじさんが3つも買っていくとは幸先が良いスタートだ。店内は早くも賑わっている。女性たちが持つカゴにはシャンプーとトリートメントが見える。中にはカゴの下半分がそれらで埋まっている人もいる。何せ「お一人様何個でも」だ。家計の財布を握る主婦にとってこの機会を逃すわけには行かないだろう。

そろそろレジが混雑するタイミングかと思った時フィリピーナさん御一行が来店した。僕は一気に緊張した。1、2、3、4、、、7人だ。カレンさんとリナさんとジェニファーさんと、あとはわからない。

「いらっしゃいませ」

「ハイ、ニシカワサン」

入ってくるやレジまでズンズンと進んできたのはジェニファーさんだ。

「コーコクミマシタ。ニシカワサンフラワー」

入り口に貼ってあるチラシを見たのかと思ったのだがジェニファーさんはポケットから折りたたまれたチラシを取り出して広げてた。

「コノアナタ、キュートネ」

薔薇を加えた僕を指さしている。

「キマシタヨ。コーコク、ミタカラ、キマシタ」

ジェニファーさんはカウンターから少し身を乗り出している。何故か必死な表情だ。

「はい。ありがとうございます。サンキュー」

などと言っているとジェニファーさんの周りに仲間が集まり始めた。みんな口々に「ニシカワサン」「ニシカワサン」と繰り返しており、時折「アイラビュー」が挟まれる。その様子を隣のレジで見ていた大石さんは声を殺して笑っている。

やがてひとしきり喋って満足したらしいフィリピーナさん御一行はレジから離れシャンプーとリンスの場所に集まって何か会話を始めた。

「高野店長の言った通りなんですね」

大石さんは彼女らを眺めていた。

「ああ、聞いていましたか。もう情熱的過ぎて」

悪い気はしないのだが些か居心地の悪さを感じてしまうのだ。

さて、少しずつレジが混んできた。開店時に来店したお客さんが一通り店を回って会計にくるタイミングなのだ。多くのお客さんが目玉商品をしっかりと押さえており10点20点数えることが続いた。会計をしながら商品の動きをチェックしていたが、仕入値の高い商品と低い商品が良いバランスで売っていた。割合で示すならば3：7といったところか。もちろん3が仕入れ値が高い商品である。欲を言うならばもう少し低くなってほしい。2.5：7.5が理想だ。しかしここはお客さんに任せるしかないのでどうしようもない。我々に出来るのは「如何に陳列して如何に誘うか」だ。

チラシで紹介した商品がバンバン売れるので店長と川島さんは慌ただしく補充をしている。

レジが途絶え「ふう」と一息ついた時、茶髪の女性がクチャクチャとガムを噛みながらシャンプーとトリートメントを持ってやってきた。目の周りのメイクがキツめで瞬きする度にバツバツサとなりそうなつけまつげをバッチリ決めている。ちょっと露出が多めのダラけた感じのファッションだ。見事に僕の苦手なタイプである。

「あのお、これ何個でもいいんですか」

やはり喋り方もダラけている。

「はい、何個でも結構です」

「あマジでえ」

マジだ。

「あじゃあ10個とか買っても良いんですか」

「はい、大丈夫です」

「あマジでえ」

マジだ。先ほど「何個でも結構です」と言ったはずなのだが理解できなかつたらしい。脳もダラけているのだろうか。それと会話の頭に付く「あ」が非常に気になる。癖なのだろうか。

女性は踵を返したかと思うとカゴを持ち、シャンプーとトリートメントを「いちにいさんしー」と数えながら入れ始めた。どうやら両方10個ずつ買うつもりらしい。シャンプーとトリートメントで埋まったカゴを両手で持ち会計に来た。

「いらっしゃいませ」

笑顔で迎え点数を数える。やはり10点ずつの20点だ。

「2100円になります」

「あ、はああい」

やけに間延びした返事をしながら手に下げていたバッグを開いた。女性が財布を取り出す間に商品を袋に入れていると「あれ？」「あれ？」と声がした。先ほどとは打って変わってハキハキした、いや切羽詰まった喋り方だ。声の主はもちろん目の前にいる女性だ。

「あああ、財布忘れてきた」

マジで？

女性は「ええと」「あどうしよ」「えっと」と繰り返す。

「すみません、すぐ来るので取っておいてもらっていいですか？今日中に来ますから」

このようなケースは多々あるので問題はない。僕は「はい、かしこまりました」と袋をカウンターの下に置いた。

「ではお名前だけでもお願いします」

「アリサです」

通常、こういった場合は苗字を答えるものだと思うのだが。しかも「アリサ」なのか「リサ」なのかわかりにくい喋り方だ。

「アリサ様？」

「あ、いえ、リサです。『理科』の『理』に『さんずい』に『少ない』で」

女性はカウンターで指を動かして説明をした。僕はメモ用紙に「理沙」と書いた。

「苗字の方は...」

「あカガワです」

「カガワ様ですね」

「あ、いえ、アカガワです。『赤い』『川』で」

面倒臭い人だと心で呟く。「赤川理沙様 財布忘れ 本日中に来店されます」と書いたメモを袋に貼りカウンターの下に置いた。

「では取り置きしてしますので来店の際はレジに声をかけてください」

女性は「あはい」と返事をすると携帯電話を弄りながら出入り口へ向った。

「あもしもしー今ひゃっきんで財布忘れてマジはずいんだけど」

そんな声を店内に残して自動ドアが閉まった。

今の時刻は約10時30分。闘いはまだ始まったばかりだ。

さあ来るぞ。僕は気合を入れた。フィリピーナ御一行様がレジに向ってきているのだ。ジェニファーさんは「会計は私が」という表情でカゴを持ち、瞳は僕をロックオンしている。カゴにはかなりの量が入っているのだが、その隣を歩く人もその後ろにいる人も商品がドッサリ入ったカゴを持っている。恐らく会計は一緒にするのだろう。これは長期戦になりそうだ。

「大石さん、袋入れるの手伝ってもらっていいですか」

「はい」

大石さんは「休止中」のパネルをレジに置き、僕の脇に立った。

「いらっしゃいませ」

試合開始のゴングが鳴った。いちにいさん、、、と数えながら大石さんの方へ商品を送る。10点で一度区切ってレジに打ち込み再び数える。

「ニシカワサン、ゲンキデスカ」

「はい、元気です」

ジェニファーさんのジャブをスツとかわし数え続ける。しちはちく、、、ピピピッと。

「コノヒト、シェリーデス」

「ハジメマシテ」

シェリーと紹介された女性が商品を数えている僕の視界に入るべく身をかがめて手を振った。

「あ、は、はじめまして」

いきなりのアッパーを避けきれずにガードした。

「マリデス、コンニチハ」

今度は違う女性が視界に入る。それを皮切りに

「アンジェラデス」

「ステファニーデス」

「グレースデス」

と次々に自己紹介が始まった。連続フックである。僕のガードが下がり気味になってきた。

「ワタシ、ジェニファーデス」

知ってるわ。僕は思わず笑ってしまいいくつまで数えたか分からなくなった。ノックアウトだ。

「ええと何個だっけ」

「次で8」

大石さんが小声でフォローした。

「みなさんは一緒に暮らしているんですか」

突然大石さんに尋ねられフィリピーナさんたちの顔が僕から逸れた。僕は、大石さんが囷作戦を執行したのだと即時に判断した。

「同じ家ですか」

「ハイ、ミンナデクラシテマス」

「日本は楽しいですか」

「ハイ、トテモタノシイデス」

大石さんは袋詰めをしながらニコニコと会話をしている。さすがベテランだ。グッジョブ。僕は好機到来とばかりに高スピードで数えた。みるみるカゴの中身が大石さんの袋へと移っていく。

ピピピッとレジを叩き「ふう」と静かに息を吐いた。合計63点だ。

「6615円になります」

顔を向けるとジェニファーさんは大石さんとの会話に夢中になっていて気付いていないようだ。さてどうしようか。と、後ろにいたステファニーさん（だったと思う）がジェニファーさんの肩を叩いて何かを言った。ジェニファーさんがレジを向く。

「6615円になります」

もう一度言うとジェニファーさんは財布から千円札を7枚出した。

「385円のお返しになります」

お釣りとレシートを差し出すとジェニファーさんは受け取りながら僕の手をギュッと握った。いつものことだ。

「ありがとうございました」

大石さんと共に頭を下げる。

「ニシカワサン、オゲンキデ」

「アイラビュー」

「グッバーイ」

それぞれが言いたいことを言いながら店を後にした。

「いつもあんな感じなの？」

「そうですよ。人気者です」

僕は自嘲気味に笑った。

「でも西川君を目当てに買い物に来るから良いよね」

「結構な量を買っていくのでありがたいですよ」

「で、誰が好みなの？」

「やめてくださいよ」

大石さんは「あはは」と笑い自分のレジへと戻った。

店内が徐々に混雑してきたかと思えば現在は12時を回ったところだ。カップ麺の付近にはスーツ姿の男性客が3人おり、その中の2人は同僚らしく無駄に大きい声で会話をしている。

「やっぱ縁でしょ」

「えー、赤だって」

「じゃあタケノコとキノコは？」

「当然タケノコでしょ」

「だよなあ」

休日出勤ご苦労さまです。僕はキノコ派です。と心で言う。ちなみにタケノコもキノコも当店

で扱っている。「え、あれ100円で買えるの？」と驚く人もいるだろう。それが買えるのだ。ただし100円ショップ用にアレンジしているのか「村のタケノコ」と「森のキノコ」という名前になっており、販売元やパッケージがちょっと違う。しかも最近新商品として一つの箱にタケノコとキノコが半分ずつ入っている「みんなともだち タケノコとキノコ」という商品が出た。巷では「タケノコキノコ戦争」が繰り広げられているらしいが当店では既に終結している。

緑と赤の会社員がレジを済ませると店内は昼のピークを迎えた。次から次へとお客さんが来店しレジも混雑した。あっという間にシャンプーとトリートメントの箱は空になり、店長が新しい箱を補充した。「何個でも」とPOPに書いたので「全部買います」などというお客さんが来たらどうしようかと思っていたが今のところそのような曲者はいない。

「お、広告に載ってたあんちゃんだね」

などと時々声をかけられたが笑って誤魔化した。

店内が一段落したのは13時を周った頃だった。

「西川君、大石さん、休憩入っていいよ」

と店長に言われ、僕らは事務室に戻った。

ロッカーから弁当を出し椅子に座っていると大石さんが飲み物を買ってきてくれた。「ありがとうございます」と受け取ったがボトルのパッケージが怪しい。「違うのにしようかと思ったんだけど、これ売れ残ってたから少しでも減らさないと思ってね」とのことだ。大石さんはコンビニのおにぎりをかぶりつきながらグビグビと飲んで「うん、不味い」と言っている。レモン味の炭酸飲料なのだが、メンソールのようにスースーするのだ。真夏の炎天下で死にそうな時だったら物凄く美味しいかもしれないが、現状では激しく不味い。ご飯に合わない。ハッカの匂いを嗅ぎながら米を食べているようだ。

「ごめん、美味しくなかったね」

「いえ、普通に飲めますよ。大丈夫です」

たまにはこういったパンチのある昼食も良い。話の種になる。しかしもう二度と買うことは無いだろう。

「相沢さん、本当にもう来ないの？」

大石さんがおにぎりの袋を片付けながら言った。

「わからないんですよ。店長に連絡いったのかな」

「高野店長も『わからない』って言ってたよ」

「そうなんですか。まあ来ないなら来ないで平和なんですけど」

「確かにね」

うんうんと頷く大石さんを見てふと疑問に思った。

「大石さんって相沢さんと仕事したことあるんですか？」

「ん、あるよ。相沢さんが入ってきたばかりの頃私もここで働いていたから。あっちの店が人手足りないって話になって、家が近い私が異動することになってね。適当でしょ？で、私がかこいなくなるから店員を募集して、その時来たのが相沢さん。1ヵ月付きっ切りで仕事を教えたわけ」

なるほど。だから大石さんは店長と隔たり無く会話していたのか。ところで、

「その頃ってどんな人だったんですか？」

「んー。変わった人だったよ。最初から」

「問題起こしてました？」

「うん。でも私がいた時は注意していたんだけどね。あっちに異動なってから時々高野店長と電話するんだけど、相沢さんの話で持ちつきりよ。だいぶ悩んでみたいよ」

やはり相沢さんはいない方がいいのかもしれない。特に現在こういった追い込まれた状況にいるのならば尚更だ。しかしひょっこりとやってきそうだから怖い。あの人のことだから、昨日も一昨日も出勤していたような顔で平然と来るだろう。でも、

「でもある意味名物だよ。なんとなく寂しくない？」

僕が思っていたことを大石さんが言った。

「そうですね。相沢さんは滅茶苦茶なんですけどその方が緊張感があって楽しいってのはあります」

「だよねえ」

僕は大きくため息をついて黙り込んだ。大石さんも「んー」などと言うが言葉を発しない。事務室に沈黙が流れる。時計は14時5分前だ。

「さてそろそろやりますか」

背伸びをして立ち上がった。

「後半戦だね」

大石さんはポキポキと指の骨をならしながら首を左右に傾けポキッポキッとならした。こういう姿を見ていると非常に頼もしい。

店内に戻るといつものような静けさはなかった。チラシの効果は絶大だ。恐らく今の時点で、いや昼の時点でいつもの売り上げは軽く越えている。

「店長、川島さん、変わります」

レジで作業していた2人に声を掛けた。

「お客さんどんな感じですか」

店長に聞く。

「調子良いね。客単価が高い」

「あ、そうだ。『キヨシ君はいないんですか？』って聞かれたよ」

川島さんが笑いながら言う。

「『すみません今休憩中なんです』って言ったら『なんだ、現物見てみたかったのにー』だつてさ」

「どんな人ですか？」

「え？ピチピチのお婆ちゃん」

どんなお婆ちゃんだよ。まあ大体予想はしていたが。

「もう店の看板だね」

大石さんは「このナイスガイ」と肘で僕をこついだ。店長は「ふふっ」と笑って川島さんと事務室へ向った。

レジでお客さんを捌いていると川島さんがペットボトルを持って会計に来た。

「これ余ってるから買う」

例のやつではないか。

「これ、やめたほうがいいですよ」

「どんな味なの？」

「薄いレモン味の炭酸で、ハッカみたいにスースーします」

「やーめた」

川島さんは商品を戻し、無難な（仕入れ値が高い）飲み物を買っていった。

食料品売場での関門はあの炭酸だ。あれが無くなると利益にならない。つまり仕入れ値が安いということなのだが。カップ麺に至っては順調に売れている。6個入りの袋も多く出た。予め作っていたセットが無くなりかけているので、店にある在庫を使って同じセットを作ると店長は言っていた。だからあの炭酸がバーンと売れてしまえば何の問題も無い。ポツポツと空きつつある棚の中、2列にギッシリと並んでいるボトルの存在感が危険なオーラを放っている。今朝の時点では先週箱から出したのだが1本しか売れていなかった。先ほど大石さんが2本買ったので残り21本だ。しかし倉庫にはもう一箱残っているのだ。つまり合計45本。ドーンと買ってくれる人はいないのか。ポーンでもいい。トンでもいい。とにかく買ってくれ。買ってください。

そんな僕の祈りとは裏腹に、飲料水の付近で品定めをする人たちは怪しげなボトルに手を伸ばそうともしない。祈りが届かないのは日ごろの行いが悪いせいだろうか。飲み物を選ぶお客さんたちの様子をチラチラと眺めながらレジを打っていた。

「210円になります」

爪切りと絆創膏を買った目の前のおっさんに言う。

「あとあれ買うわ。にいちゃん運んでけろや。全部買うから。あれしか無えんだよな」

おっさんは飲料水のコーナーを指差したので僕は駆けた。

「どちらの商品でしょうか」

「その並んでるやつだ。出てる分だけか？」

「いえ、もう一箱あります」

「んじゃそれもだ」

バーンと売れてしまった。僕は倉庫に走り箱を持ってきた。このおっさん、神だ。

「こちらが45点ですので合計47点で4935円になります」

「はいよ」

神のおっさんはきっちり4935円トレイに出した。

「これな、焼酎で割ると旨えんだよ。そのまま飲むと不味いけどな。ここにしか売ってねえみてえだ」

あの1本を買ったお客様でしたか。

適当なダンボールを使い爪切りと絆創膏の入った袋とボトル23本を入れた。神のおっさんはそのダンボールを持ち

「にいちゃん、これ車まで運んでもらえっか」

と未開封の箱を顎で指した。

「はい、かしこまりました」

僕はひょいと箱を抱え神のおっさんと共に店を出た。

神のおっさんはセルシオのトランクを空け「そこにボンと入れてくれ」と言ったが僕は慎重に収めた。

「ありがとうございました」

駐車場から去っていくセルシオに頭を下げる。心でガッツポーズだ。

店長、今日は何かが起きますよ。

店長が電卓を叩きブツブツと呟きながらペンを走らせている。机の上に無防備に置かれている本日の売上金。一目見ただけで普段の売上を遥かに超えていることがわかる。

「よし」

店長は先ほどまで書き込んでいた紙をバツと見せた。僕と川島さんと大石さんの視線がそこに集まる。業務日誌と精算が記録された紙の下部【本日の売上】の欄には「221,865」と書かれてあった。

「20万超えたんですか」

僕は驚いた。何せここ数年、当店の1日の売上は10万円を超えるか超えないかだったからだ。記録紙に打たれてある客数は「165」。一人平均12~13点買ったことになる。確かに本日のレジは数えるのに忙しかった。

「あとはこれが続くかどうかだね」

店長の言葉にみんな頷いた。続かなければいけないのだ。少なくともこの一ヶ月は。

「シャンプーはあとどれくらい残っているんですか？」

「んー、シャンプーとリンス合計で1500はあるかな」

ということは一日で500個売れたのか。本日の売り上げの4分の1がシャンプーとリンスだ。このままいけばあと3日は良い結果を期待できる。

「でも明日から平日ですからね」

そうだった。今日は日曜日だったのだ。どんなに当店がお祭り騒ぎをしても世の中が平日ならば効果は薄い。混雑するのは昼時か夕方になるだろう。

「明日のシフトをどうしようか迷ってるんだよね。私は一応朝からいるけど」

店長は「どうする？」と聞くように首を傾げた。

「私は出勤してもいいですよ」

「あ、私も大丈夫です」

「僕も問題ないです」

正直に言うと休みたかった。ザ・疲労困憊である。だがこの流れで「じゃあ僕は休みます」などと言えない。そもそも一番下っ端の僕がみんなよりも先に休みをもらうわけにはいかないのだ。

「明日は一人休んでも良いと思うのよね。私は一日いるから。開店から15時までと、15時から閉店までの二交代にしようかなって。平日だけど常に二人はいた方がいいと思うから」

「私はどっちでも良いですよ」

川島さんがトスを上げる。

「あ、じゃあ僕が朝出ます」

僕の口が暴走した。「僕もどっちでも」と大石さんにレシーブするつもりだったのだが、何を思ったのかいきなりスパイクを決めてしまった。クイックキヨシ炸裂。

「じゃあ朝西川君ね。お昼は忙しくなると思うから交代しながら早めに食べようね。15時から

...川島さんで良い？」

川島さんが「はい」と頷いた。

「大石さんは明日休みで」

「はあい」

大石さんは「明日はゆっくり寝ていよう」と呟く。

「今日は楽しかったね」

店長は僕を見た。

「そうですね、色んな意味で楽しかったです」

「フィリピンの人たちはいつもあんな感じなの？みんな西川君のファン？何人くらいいるの？」

大石さんは興味深々のようだ。

「すごいんだよお。手振ったり投げキッスしたりハグしたり」

「ちょっと店長、ハグは無いですよ」

僕は慌てて否定した。

「今のところはね。でもそのうちハグされるよ」

そうかもしれないがフィリピンではハグの文化はあるのだろうか。しかし彼女たちならやりかねない。

「西川君モテモテなんだね」

「でも彼女いないんですよ」

川島さんの鋭い突っ込みにみんな笑った。僕が一番気にしていることを...

そして次の日。

朝から微妙に客数が多くレジに張り付いていた。本来なら店内の整理や品出し作業をしているはずの店長は、現在事務室に籠っている。正確に言うなら店長ともう一人だ。

本日店を開けて15分ほどたったとき、「彼女」はやってきた。レジにいた僕を見て

「あ、西川さん。店長と話がしたいんですが」

と怪しげな笑顔で切り出した。この魔女の笑顔は実に2週間ぶりだ。そう、「彼女」とは相沢さんである。僕が店長を呼ぶより早く、商品の整理をしていた店長が相沢さんに気がついた。恐らく相沢さんの放つ何かを感じ取ったのだろう。そして「面倒くさい」と書かれた顔で店長は相沢さんを事務室に通したのだ。

それから1時間が経とうとしている。話はどんな方向に進んでいるのだろうか。気になって仕方がない。いっそのこと辞めてもらえば良いのだが。...などとは決して思っていない。断じて。しかしあの大人げない勝手な行動は罰せられるだろう。減給になるのだろうか。それによって地位的に僕よりも下になるだろう。相沢さんを顎で使う日はそう遠くない。僕は無性にワクワクしてきた。というのは勿論冗談である。冗談ということにしておいてほしい。

「知ーらね、俺知ーらね」

食料品売り場で子供たちがワイワイと騒いでいる。そう、知ったこっちゃない。相沢さんがどうなろうと僕は今やるべきこと、出来ることを最大限にやるだけだ。

10時20分。そろそろ店長とレジを交代し僕は店内整理をしたいのだが店長はまだ出てこない。だがお客さんの数が少なかったので僕はレジを見ながら店内を周ることにした。事務室のドアが開いたのは僕がハンディモップに手を伸ばした瞬間だった。

「西川くん」

店長が僕を呼び、隣にいる相沢さんに何かを促す。相沢さんは僕と一瞬目を合わせて頭を下げた。

「大変ご迷惑をお掛けしました。心を入れ換えて一生懸命働きますので今後もよろしくお願ひします」

「あ、はいわかりました。こちらこそよろしくお願ひします」

どうやら働くことになったらしい。とても残...いや良かった良かった。

「とりあえず相沢さんは明日以降のシフトに入ってもらうことにしたので」

と店長は補足をし相沢さんを見て頷いた。相沢さんは「それでは今日は失礼します」と店長と僕にもう一度頭を下げてトコトコと店を出ていった。それにつられるように先ほどの子供たちと母親と思わしき人が出ていく。

「なんて言ってました」

「『あの時は舞い上がってて感情にまかせてしまいました』だって」

あの状況で舞い上がるとは流石である。

「舞い上がる、の使い方間違ってるよね」

店長はクスクスと笑う。

「真面目な表情だったから指摘できなくてね。笑いを堪えるのが大変だった」

「それはそれはお疲れ様でした」

僕も笑いながら店長を労った。

「とりあえず、時給は下げるということと勤務日数もしばらく減らすって条件でも良いならって言ったら『かまひませ

』って言うから」

「じゃあしばらく大石さんは残るんですね」

「そうだね、この期間大石さんいないと困るでしょ」

僕は一安心したがいずれ大石さんが居なくなることに不安を感じた。

「じゃあ私レジ入るから」

僕は「了解です」と店内の整理に回った。

開店から2時間放置していた店内は普段以上に荒れていた。客数が多い分当然と言えば当然である。僕は店の入口からグルリと周るように次々と整理していった。迷子になっているパッカーの蓋を親の元へ連れて行き、だらしなく広げられたタオルを綺麗に畳み、DIY用品売り場に鎮座していた洗剤を元の場所へ戻し、キャップの開いた飲料水を...ってなんで開いているんだ！悪戯か！僕の頭に30分ほど前に騒いでいたガキたち、いや子供たちが過った。そういえばあいつらが騒いでいたのはこのあたりだった。「知ーらね」というのはこのことだったのだろう。

バツと振り返りガキを探そうとしたものの、相沢さんとともに店を出て行ったのを思い出した

。僕はとりあえず店長へペットボトルを持っていった。

「ええー、うそー」

「たぶんさっきの子供たちですよ。なんか騒いでいたんですよ、あそこで」

店長は「ええー」「ふざけんなー」などと言いながらペットボトルの蓋を開けたり閉めたりする。

「量は減っていないんだね。開けただけか。でも飲むわけにもいかないもんね」

「やめてくださいよ、毒とか入っていたら大変ですよ」

冗談交じりに言ったものの、ありえないとは言い切れない。結局「毒入りかもしれない開封済みの飲料水」は廃棄処分することになった。店内に他の従業員がいればこんなことは起きなかったはずだ。レジにしかいないのを見計らって悪戯をしたのだろう。それもこれも全て相沢さんのせいだ。僕は心で悪態をつきながらペットボトルの中身を洗面所にドボドボと捨てて空にし、店の前にあるゴミ箱の【ペットボトル】と書かれた穴に入れた。

そうこうしているうちに11時になり店長が先に休憩に入ったので再びレジについた。30分後に僕と交代予定だったのだが15分ほどで店長は戻ってきた。

「私ずっと座っていたから大丈夫。西川君12時まで休憩してて良いよ」

「わかりました。忙しくなったら呼んでください」

僕は「では休憩入ります」とレジから離れ事務室で昼食を食べた。今日の昼食は朝にコンビニで買っておいたツナマヨと梅干のおにぎり2つとキャベツや大根のサラダと茄子漬。そしてロッカーに常時保管しているインスタントのわかめスープ。以上だ。コンビニの袋からおにぎり等を取り出すとチロルチョコが出てきた。そういえばコンビニのレジ前にチロルチョコが置いてあり、会計の端数を合わせるために2つ買ったのだ。チョコレートは非常に良いエネルギーになる。山で遭難した人がポケットに入っていたチョコで危機を免れたという話はよく聞く。僕はいざという時のための非常食としてチロルチョコをロッカーに保管することにしよう。この仕事をしていて命の危機に晒されることなど無いかもしれないが。しかし何が起きるかわからないのが人生だ。記録的な大寒波で大雪が積もり、店から出られなくなるかもしれない。猛烈な台風で外に出ることが出来なくなるかもしれない。一晩ここに閉じこもり朝を待つことになるかもしれない。そんな時、きっとこのチョコが役に立つはずなのだ。と思ったが、店内に大量の食料品があることに気が付き僕はロッカーにしまいかけたチョコを2つ一気に食べた。バカなことを考えていないでさっさと飯を食べてゆっくり休め、清志。「はい、そうですね」とわかめスープにお湯を入れツナマヨのビニールを剥しガツガツと食べる。サラダの蓋を開け「あれ、ドレッシングが無いぞ」とパッケージを確認し【ドレッシングは別売りです】の文字を見つけたが見なかったことにしてわかめスープにブチ込んで食べる。僕はサラダはいつもこうやって食べるのだと自分に言い聞かす。ツナマヨに続き梅干も那須漬をアクセントにしながら食べる。両方ともしょっぱい。茄子漬はツナマヨと食べるべきだったが後の祭りだ。

10分ほどで食事を終えたがラストがしょっぱかったので甘いものが食べたくなった。しかしチョコは食前に食べてしまった。先ほどからなにかちぐはぐだ。チョコは店で買えばいいのだが面倒くさい。僕は休憩時間が終わるまで一眠りすることにした。満腹になったためか睡魔がやって

きたのだ。時計を確認し30分は眠れるだろうと腕に頭を乗せ目を閉じた。店内の音が徐々に遠ざかる。意識がしじまの向こうへ行きかけた時電話が鳴った。オージーザス！

「お電話ありがとうございます。100円ショップスマイルの西川でございます」

声のトーンを上げて受話器を取った。

「あー、100円スマイルさん。今日は営業していますか」

初老の男性の声だ。

「はい、営業しております」

「はいはいわかりましたー、どうもー」

プツリと電話が切れる。

「当店は年中無休でえす」と小声で言いながら受話器を元に戻し再び腕に頭を埋めた。だが電話で声を出したせいか頭がスッキリとしてしまい眠ることが出来ない。睡魔を待つがどうやらどこかへ飛んで行ったらしい。眠るのを諦め頭を上げた。何気なく携帯電話をチェックするが誰からも連絡は無い。誰かにメールでもしようかと思い、アドレス帳に登録された少ない名前を眺めていると店内が賑やかになっているのを感じた。携帯電話には11時48分と表示されている。さて、少し早いけど行きますかね。

いざ戦場へ。僕は大きく伸びをして鏡で身だしなみをチェックし店内へのドアを開けた。

結論から言うと、当店は閉店する方向で決まった。

今日が最後の1日である。

あれから約1ヶ月、確実に客数も客単価も売り上げも伸びていた。しかしそれを維持するのには限界があった。原価の高いものは利益が少なく、結果的には以前と大して変わらなかったのだ。

他の系列店に抜擢されるなどというサクセスストーリーが用意されているわけでもなく、僕は無職になる。

入り口に貼ってある「閉店のお知らせ」と書かれた紙を見たお客さんは一見残念そうだが100円ショップは他にもあるので大した打撃にはならない。しかし本当に当店の良さを知っているお客さんには「この商品は他の100均と違って良い物あったのになぁ」と声を掛けてくれる。

紙を掲示して初めてフィリピーナ御一行さんが来たときは僕のところに雪崩のように飛び込んできた。片言の英語とわかりやすい日本語で説明をすると大変寂しがっていた。

そういえばあのおじさんは今後どこで電池を調達するのだろうか。

自分の身よりも常連さんたちの今後が心配になってしまう。

僕はこの仕事が終わったら旅にでるつもりだ。

これからのことはその時に考えようと思う。

自動ドアが開く音がして「いらしゃいませ」とお客さんを見る。初老の男性だった。

「すみません。コピー機ってありませんか？」

僕は優しく近くのコンビニを案内した。

完